

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 4

干 潟 遺 跡 II

福岡県文化財調査報告書

第 87 集

1989

福岡県教育委員会

干 潟 遺 跡

小都市大字干潟所在遺跡の調査

1989

福岡県教育委員会

序

県道久留米・筑紫野線の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和51年度から始まりました。これまでの14年の間に干潟・東小田峯・東小田七板・天道町という4つの遺跡が調査されております。

この報告書は、昭和55年度に行った小都市^{りつ}干潟遺跡第三次調査の記録であり、干潟遺跡についての二冊目の報告となります。

干潟遺跡の第一次～第三次調査の内容を見ますと、7～8世紀代の集落と墓地、それに弥生時代の甕棺墓群などが検出されており、いずれもこの地方の原始・古代の歴史を研究していくうえでの貴重な資料といえましょう。

本書が、学術研究・社会教育などに活用されるならば幸甚に存じます。

本書を発刊するにあたり、調査中および本書作成に関わられた多数の方々に深甚の謝意を表します。

平成元年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 竹井 宏

例 言

1. 本書は、県道久留米・筑紫野線建設に伴って福岡県教育委員会が昭和55年度に行った干潟遺跡第三次調査の報告である。
2. 昭和51・53年度に実施された第一次・第二次の調査報告は既に『干潟遺跡Ⅰ』として昭和55年に公刊されているので、本書を『干潟遺跡Ⅱ』とする。
3. 調査時の遺構実測・写真撮影は宮小路賀宏・伊崎俊秋が行い、遺構の実測について中間研志の援助があった。
4. 遺物の復原については岩瀬正信の指導のもとに九州歴史資料館にて行った。
5. 遺物の実測は平田春美・若松三枝子・鬼木つや子・佐藤みゆきと伊崎が行った。
6. 遺構・遺物の整図は豊福弥生・鶴田佳子と伊崎が行い、図面整理等に関久江・古賀陽子・高畠美智子の援助を受けた。
7. 遺物写真は石丸洋の指導のもとに須原悦子が撮影した。
8. 本書内の遺構に示した方位は磁北である。
9. 本書の執筆はⅠを宮小路が、Ⅲ-Aを宮小路と伊崎が、それ以外を伊崎が行った。
10. 本書の編集は伊崎が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	2
1. 周辺の遺跡	2
2. 従前の調査の概要	4
III. 調査の内容	6
A. 概要	6
B. 生活遺構と遺物	9
1. 竪穴住居跡	9
2. 掘立柱建物跡	25
C. 墓地及び関連遺構と遺物	29
1. 埴棺墓	29
2. 土墳墓	44
3. 祭祀遺構	50
D. その他の遺構と遺物	55
1. 土壇	52
2. その他の遺物	52
IV. おわりに	54
1. 7～8世紀代の干潟遺跡	55
2. 弥生時代の干潟遺跡	58

図 版 目 次

- 図版 1 千両遺跡第三次調査全景（南から）
- 図版 2（上） 3-I区全景（南から）
（下） 3-II区全景（西から）
- 図版 3（上） 3-V区全景（南から）
（下） 3-VI区全景（北から）
- 図版 4（上） 3-VI・VII区全景（南から）
（下） 3-VIII区全景（南から）
- 図版 5（上） 37号住居跡（北から）
（下） 37号住居跡カマド
- 図版 6（上） 38号住居跡（東から）
（下） 39～43号住居跡（南から）
- 図版 7（上） 39号住居跡（南から）
（下） 39号住居跡カマド土器・川土状態
- 図版 8（上） 43号住居跡（東から）
（下） 23号掘立柱建物跡（西から）
- 図版 9 3-V区墓地群（A群）全景（北から）
- 図版10（左） 33号変棺墓（北から）
（右） 34号変棺墓（北から）
- 図版11（上） 35号変棺墓（北から）
（下） 36号変棺墓（西から）
- 図版12（左） 37号変棺墓（西から）
（右） 38号変棺墓（西から）
- 図版13（左） 40・41号変棺墓（北から）
（右） 2号土壇（北から）
- 図版14（上） 1号土壇墓（南から）
（下） 3号土壇墓（南から）
- 図版15 3-VII区墓地群（B群）全景（北から）
- 図版16（上） 5号土壇墓（北から）

(下)	6号土墳墓(南から)
図版17(上)	7・8号土墳墓(南から)
(下)	9号土墳墓(南から)
図版18	37・38・39号住居跡出土土器
図版19	39号住居跡出土土器
図版20	39・40・43号住居跡・1号土墳墓その他出土土器
図版21(上)	干潟遺跡出土土製品
(下)	干潟遺跡出土石器
図版22(上)	干潟遺跡出土土器・石器・金属器
(下)	3-V区の4～6号土墳
図版23	33・34・35号甕棺
図版24	36号甕棺
図版25	37・38・40号甕棺・2号土墳出土土器

挿 図 目 次

	頁
第1図 干潟遺跡と周辺の遺跡(1/50,000)	折込
第2図 干潟遺跡出土石器・金属器実測図(1/2)	7
第3図 干潟遺跡第三次調査全体図(1/1,200)	折込
第4図 37号住居跡実測図(1/60)	10
第5図 37号住居跡出土土器実測図2(1/4)	10
第6図 37号住居跡出土土器実測図1(1/3)	11
第7図 38号住居跡実測図(1/60)	12
第8図 38号住居跡出土土器実測図1(1/3)	13
第9図 38号住居跡出土土器実測図2(1/4)	14
第10図 39・40号住居跡実測図(1/60)	16
第11図 39号住居跡出土土器実測図1(1/3)	17
第12図 39号住居跡出土土器実測図2(1/3)	18
第13図 39号住居跡出土土器実測図3(1/4)	18
第14図 41・42号住居跡実測図(1/60)	21
第15図 40・41・42号住居跡出土土器実測図(1/3)	22

第16图	40·42号住居跡出土土器実測図 (1/4)	23
第17图	43号住居跡実測図 (1/60)	24
第18图	43号住居跡出土土器実測図 (1/3)	25
第19图	23号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	26
第20图	24号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)	26
第21图	24号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	27
第22图	千淘遺跡竪穴住居跡出土土製品・石器実測図 (1/2)	28
第23图	33・34号甕棺墓実測図 (1/20)	折込
第24图	33号甕棺実測図 (1/8)	30
第25图	34号甕棺実測図 (1/8)	31
第26图	35号甕棺墓実測図 (1/20)	32
第27图	36号甕棺上甕内丹塗り部分図 (1/16)	33
第28图	35号甕棺実測図 (1/8)	34
第29图	36号甕棺墓実測図 (1/20)	35
第30图	36号甕棺実測図 (1/8)	36
第31图	37号甕棺墓実測図 (1/20)	38
第32图	37号甕棺実測図 (1/8)	39
第33图	38号甕棺墓実測図 (1/20)	40
第34图	38・40号甕棺実測図 (1/6)	41
第35图	39・40号甕棺墓実測図 (1/20)	41
第36图	41号甕棺墓実測図 (1/20)	42
第37图	41号甕棺実測図 (1/8)	43
第38图	1号土墳墓出土土器実測図 (1/3)	44
第39图	1～3号土墳墓実測図 (1/30)	45
第40图	4・5号土墳墓実測図 (1/30)	46
第41图	6号土墳墓実測図 (1/30)	47
第42图	7・8号土墳墓実測図 (1/30)	48
第43图	9号土墳墓実測図 (1/30)	49
第44图	2号土墳実測図 (1/30)	50
第45图	2号土墳出土土器実測図 (1/3)	51
第46图	2号土墳出土磨製石器実測図 (1/2)	51
第47图	4～6号土墳位置図 (1/200)	52
第48图	7号土墳実測図 (1/30)	53

第49图	V区採集土器実測図 (1/3)	54
第50图	VII・VIII区出土土器実測図 (1/3・1/6)	54
第51图	干潟遺跡集落変遷図 (1/1600)	折込
第52图	干潟遺跡棺槨基群変遷図 (1/400)	59

写真挿図

		頁
Fig. 1	調査風景①	vi
Fig. 2	調査風景②	43

付図

- 付図1. 干潟遺跡全体図 (1/2,500)
2. 干潟遺跡第一次～第三次調査遺構配置図 (1/800)
 3. 干潟遺跡第三次調査遺構配置図 (1/400)
 4. 干潟遺跡第三次調査VII・VIII区遺構配置図 (1/100)
 5. 干潟遺跡墓地群遺構配置図 (1/200)



Fig. 1 調査風景①

I. はじめに

県道久留米・筑紫野線新設計画を端緒として、当該干潟遺跡の調査が実施された。調査は、道路建設の年次計画に従い、三次に分けて実施された。

第一次調査は、昭和51年12月9日から翌52年3月28日の間に行われた。調査面積は6,500㎡に及び、竪穴式住居跡19軒、掘立柱建物17棟、土壇（土器溜）12基、平安時代の円形周溝墓1基、江戸時代排水溝1条の遺構が調査された。

第二次調査は、昭和53年8月17日から翌54年2月15日の間（途中農繁期1.5ヶ月を中断しながら）に実施された。調査面積は7,500㎡に及び、竪穴式住居跡17軒、掘立柱建物4棟、横列2条、土壇墓18基、火葬墓1基、井戸1基、溝状遺構2条その他を検出した。

今回報告する第三次調査は、昭和55年9月27日から11月22日の間に実施された。調査は計画路線の幅25m、長さ230mを対象に実施され、調査面積は4,450㎡に及び、落とし穴4基、甕棺墓9基、竪穴式住居跡7軒、掘立柱建物2棟、奈良時代土壇墓1基と多数のピットを発掘した。

3次にわたる当該遺跡の調査は、路線幅25m、総延長980mに及び、調査総面積18,450㎡に達した。

福岡県教育委員会の第三次調査における関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会

〈調査時（昭和55年）〉

教育長	友野 隆
教育次長	守屋 尚
管理部長	森 英俊
文化課長	藤井 功
文化課課長補佐	蓮尾 謙吉
〃 参事補佐兼庶務係長	大淵 幸夫
〃 事務主査	豊福 金蔵
〃 調査第一係長	宮小路賀宏
〃 調査第一係技師	伊崎 俊秋

〈報告書作成時（平成元年）〉

教育長	竹井 宏
教育次長	大鶴 英雄
〃	淵上 雄幸
指導第二部長	大平 岩男
指導第二部参事兼文化課長	葉石 勲
文化課課長補佐	平 聖峰
〃 課長技術補佐	宮小路賀宏
〃 庶務係長	池原 脩二
〃 事務主査	和田 健作
〃 参事補佐兼記念物係長	栗原 和彦
〃 参事補佐	柳田 康雄
〃 調査班主任技師	伊崎 俊秋

なお、福岡県土木部・同久留米土木事務所・小郡市教育委員会社会教育課の関係各位、さらには地元干潟の皆様には調査中のみならずその前後にわたって種々御協力・御支援をいただいた。記して深甚なる謝意を表します。

II. 遺跡の位置と環境

干潟遺跡第三次調査対象地区の地番は次のとおりである。

小郡市大字干潟字船底808-3

字京ノ坪780-15 ほか

城山（花立山）は上空から見たら向筑平野のまん中に孤島のように浮かんでいる感がある。この城山の周辺にはやがて筑後川へのみこまれてゆく大小の河川が西流した南流している。そのひとつ、草場川は、曾根田川を吸収した宝満川へと合流する。その合流点の東岸に干潟の集落があり、また干潟遺跡が立地している。遺跡付近は標高が20～25m前後である。

1. 周辺の遺跡

小郡市周辺域は、古くは団地造成と九州縦貫自動車道、新しくは九州横断自動車道と中九州ニュータウン造成に関わる開発行為等の結果として、数多くの遺跡が調査されてきた。いまその調査報告書もかなりの冊数にのぼっている。それらの遺跡を時代ごとに整理して順序よく羅列することは難しいことではないが、いたずらに紙幅を費すだけのことになるので、ここでは今回の報告に関連ある遺構・遺物を検出した近隣の遺跡をいくつか拾い出して述べておくことにとめよう。

まず、近年検出例の増えてきたおとし穴については、小郡市正尻・薬師堂東・三国小学校・吹上赤土、三井郡大刀洗町春園・辻、甘木市立野・宮原などの遺跡があげられる。

弥生時代の遺跡となれば枚挙にいとまがないほど多いが、中期前半～中頃の変棺墓を営んだ遺跡といえば、小郡市津古東宮原・ハサコの宮・北牟田・正原・干潟下屋敷、筑紫野市隈天神などがある。小郡市横隈狐塚・井上北内原については中期中頃から墓地が営まれ始めている。

7・8世紀代となると、まずは小郡市小郡官衙と井上廃寺とを挙げねばなるまい。そのほかには集落としては小郡市井上北内原・大板井・向築地・宮裏・横隈狐塚・横隈鍋倉・津古中男・三国ノ鼻・薬師堂東その他がある。

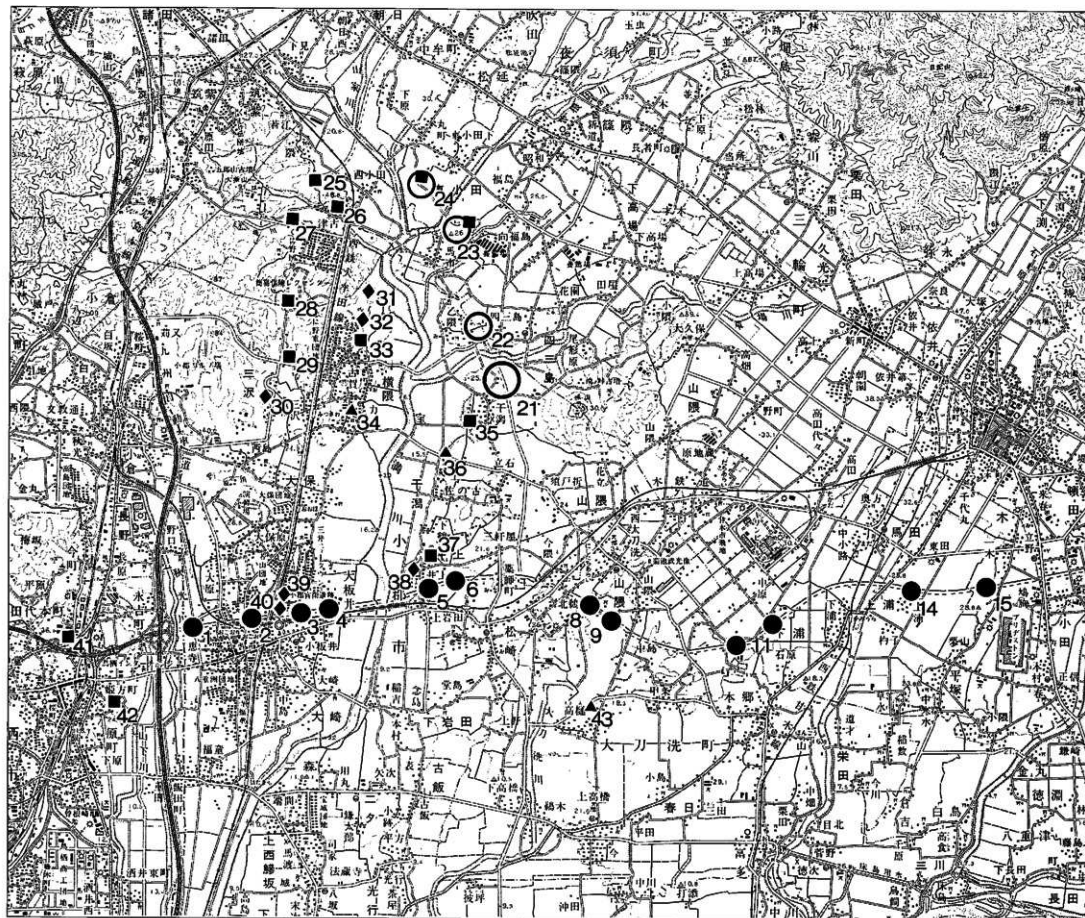
註1. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（7）』1986

2. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（13）』1988

3. 小郡市教育委員会『三国小学校遺跡』（小郡市文化財調査報告書 第10集）1981

4. 小郡市教育委員会『三国小学校遺跡II、吹上赤土遺跡』（小郡市文化財調査報告書 第36集）1987

5. 福岡県教育委員会が九州横断自動車道建設に先立って1984年に調査した。



1. 小田正武道路
2. 小田正武道路
3. 大板井道路
4. 大板井道路
5. 高野道路
6. 高野道路
7. 高野道路
8. 高野道路
9. 高野道路
10. 高野道路
11. 高野道路
12. 高野道路
13. 高野道路
14. 高野道路
15. 高野道路
16. 高野道路
17. 高野道路
18. 高野道路
19. 高野道路
20. 高野道路
21. 高野道路
22. 高野道路
23. 高野道路
24. 高野道路
25. 高野道路
26. 高野道路
27. 高野道路
28. 高野道路
29. 高野道路
30. 高野道路
31. 高野道路
32. 高野道路
33. 高野道路
34. 高野道路
35. 高野道路
36. 高野道路
37. 高野道路
38. 高野道路
39. 高野道路
40. 高野道路
41. 高野道路
42. 高野道路
43. 高野道路

第 1 図 千瀬道路と周辺の道路 (1/50,000)

6. 大刀洗町教育委員会『辻遺跡』(大刀洗町文化財調査報告書 第1集) 1987
7. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(2)』1983
福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(5)』1984
福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(8)』1986
8. 福岡県教育委員会が九州横断自動車道建設に先立って1981～1984年に調査した。
9. 小郡市教育委員会『津古束宮原遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第18集) 1983
10. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XXXI-』1979
11. 小郡市教育委員会『干潟下屋敷遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第37集) 1987
12. 福岡県教育委員会『国道200号関係埋蔵文化財調査概報』(福岡県文化財調査報告書 第67集) 1984
13. 小郡市教育委員会『横隈狐塚遺跡II』(小郡市文化財調査報告書 第27集) 1985
14. 小郡市教育委員会『井上北内原遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第20集) 1984
15. 福岡県教育委員会『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報』(福岡県文化財調査報告書 第39集) 1968
福岡県教育委員会『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報』(福岡県文化財調査報告書 第49集) 1971
小郡市教育委員会『小郡遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第6集) 1980
16. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(15)』1988
17. 小郡市教育委員会『向築地遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第5集) 1979
18. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-V-』1974
19. 小郡市教育委員会『横隈狐塚遺跡I』(小郡市文化財調査報告書 第17集) 1983
小郡市教育委員会『横隈狐塚遺跡III』(小郡市文化財調査報告書 第29集) 1986
小郡市教育委員会『横隈狐塚遺跡IV』(小郡市文化財調査報告書 第46集) 1988
20. 小郡市教育委員会『横隈鍋倉遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第26集) 1985
21. 小郡市教育委員会『津古中野遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第33集) 1986
22. 小郡市教育委員会『三国の鼻遺跡III』(小郡市文化財調査報告書 第43集) 1988

2. 従前の調査の概要

干溝遺跡については今回報告分を含めて既に5回の発掘調査が行なわれている。それは県道久留米・筑紫野線に関わるものが3回（県教育委員会調査）と、小都市教育委員会による調査が2回というものである。それを調査の順に示せば次のようになる。

1. 県道久留米・筑紫野線 第一次調査

1976年12月9日～1977年3月28日

2. 県道久留米・筑紫野線 第二次調査

1978年8月17日～1979年2月

3. 小都市教育委員会緊急調査（市単費）

1979年11月5日～1979年11月8日

4. 県道久留米・筑紫野線 第三次調査

1980年9月27日～1980年11月22日

5. 小都市教育委員会調査（国庫補助事業）

1982年5月17日～1982年8月10日

以上のうち、今回報告分を除いて他は既に報告書が刊行されている。ここに、今回報告分の内容をよりよく理解するための一助として、以下に既往報告分の検出遺構と、出土遺物のうちで注意すべきものについて記しておく。

〈1. 県道第一次調査〉

- ・^(R1) 竪穴住居跡 19軒（1～19号）
- ・掘立柱建物 18棟（1～18号）
- ・土壇 12基（1～12号）
- ・円形周溝墓 1基

竪穴住居跡・掘立柱建物・土壇については7世紀中頃から8世紀中頃の間の所産である。住居跡は方形もしくは長方形プランのものばかりで、全てがカマドを有する。1・2・5・14・9号の各住居跡には床（下層）に中央土壇がある。また、11号住居跡はくぼみ状の土壇内に方形の住居跡を造った如き状況で検出されている。円形周溝墓は木蓋土壇墓を主体部におくもので、平安時代（10世紀中頃）に比定されている。遺物としては何といても3号土壇出土の金製の玉が白眉をなす。これ以外では4号土壇出土の焼塩土器、3号住居跡出土の有孔土製品が特殊なものと言えよう。鉄器は8点、砥石は4点、紡錘車4点、土鍾2点の出土を見る。

〈2. 県道第二次調査〉

- ・^(R1) 竪穴住居跡 17軒（20～36号）
- ・掘立柱建物 4棟（19～22号）

- ・土墳 7基 (13～19号)
- ・井戸状遺構 2基 (1・2号)
- ・土墳墓 18基 (1～18号)
- ・溝列 2
- ・溝 2条 (1・2号)
- ・火葬墓 1基

竪穴住居跡・掘立柱建物・土墳などは第一次調査で検出されたものと少しも変わらない。しかし時期的には第二次調査の方がやや古く、7世紀後半代を主体としている。土墳墓とされている18基のうち2・3・4・5・6号の5基については、所謂おとし穴とした方が妥当のように考える。

遺物で注目すべきは30号住居跡出土の方形板先瓦である。これ以外では鉄器8点、磁石1点、紡錘車5点、耳環2点、土鍾3点などが出土している。

〈3. 市教委調査 (単費分)〉

- ・土墳墓・木棺墓 6基 (D1～D6)
- ・貯蔵穴 2基

貯蔵穴は2号が弥生中期前半とされている。土墳墓・木棺墓は2～6号が弥生中期前半に、1号は7世紀後半頃に比定されている。なお、5号土墳墓の棺外に完形の磨製石剣が副葬されていた。

〈5. 市教委調査 (国庫補助事業分)〉

- ・甕棺墓 32基 (K1～K32)
- ・土墳墓・木棺墓 10基 (D1～D10)
- ・土墳 (祭祀) 1基 (1号)
- ・溝状遺構 1条
- ・古墳 1基 (母底1号墳)

甕棺墓は成人用24基、小児用8基である。弥生中期初頭～中期中頃のものだが、大半は中期前葉に属する。土墳墓、木棺墓は10基ともに出土遺物がなく時期不明だが、9号土墳墓についてはその南方にある溝状遺構がこれに伴う祭祀遺構であるとして弥生中期初頭が考えられている。祭祀土墳である1号土墳は弥生中期前半に掘られ、同中期後半にはある程度埋まっていたとされる。この土墳の中期前半の垂直上から出土した板状鉄斧は注目される。

母底1号墳は墳丘規模はわからないが西に開口する竪穴式石室を主体部にもつ。石室は盗掘が著しい。7世紀前半の築造にかかり、同後半までの時期が与えられる。

註1 福岡県教育委員会『干潟遺跡1』(福岡県文化財調査報告書 第59集)1980

2 小郡市教育委員会『干潟遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第16集)1983

III. 調査の内容

A. 概要

この第三次の調査においては、発掘に着手した順にⅠ～Ⅶ区の区分けをした。それは路線の北から南の方向（終点側から起点側）へ、農道や用地界を目安として便宜上行ったものである。ここでは第一・二次調査との混同を避けるため、3-Ⅰ区～3-Ⅶ区としておく。以下にまずその各区ごとの概要を記す。（付図3参照）

なお、この第三次調査において、現場では従前の調査に関係なく新規に遺構番号を付けていたが、そのままだと県教育委員会第一・二次調査及び小都市教育委員会調査分と混同しやすくなるので、下表のようにふりかえることとした。その際、住居跡・掘立柱建物・甕棺墓については先行する調査報告に続けての番号としたが、土墳墓だけは過去の報告が一連でないのでも第三次調査でのみの一連番号とした。

住 居 跡		掘立柱建物		甕 棺 墓		土 墳 墓	
新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
37	1	23	1	K33	K 1	D 1	3-Ⅲ・Ⅴ区D 1
38	2	24	2	K34	K 2	D 2	" D 2
39	3			K35	K 3	D 3	" D 3
40	4			K36	K 4	D 4	3-Ⅵ・Ⅶ区D 1
41	7			K37	K 5	D 5	" D 2
42	5			K38	K 6	D 6	" D 3
43	6			K39	K 7	D 7	" D 4
				K40	K 8	D 8	" D 5
				K41	K 9	D 9	" D 6

3-Ⅰ区は草場川を目にした所であるが、川からかなりの比高があるので住居跡等の存在を予想していた。しかし、実際は北半部において小さなピット6個を検出したのみである。南半部は灰黄褐色の花崗岩ばいりん土を地山とするくぼみとなった所に、黒褐色壤土、茶褐色粘質土、黄褐色壤土が自然に堆積していた。ここには小さな谷が入りこんでいたらしい。表土下より昭和27年（1952）鑄造の10円硬貨が1枚出土したのみで、他に遺物は全くない。

第2図O-C₁がその表土層から出土した10円硬貨である。表には「10」の下に「昭和二十七年」の年号が入り、これらを月桂樹の葉が囲んでいる。裏は中央に宇治平等院鳳凰堂をおき、その周辺には文様とともに上部に「日本国」、下方に「十円」の文字が配される。側縁にはギザと呼ばれる刻みが入る。重さ4.5g。この10円青銅貨は昭和25年（1950）の法令公布により翌昭和26

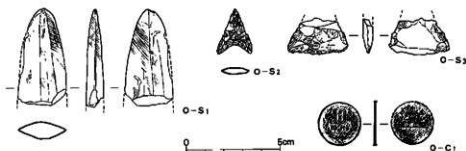
年から鋳造され始めるが、使用が開始されたのは昭和28年（1953）からという。また、崗縁にギザのない10円貨は昭和34年（1959）2月16日から使用が開始されたとのことである。つまり昭和33年の10円硬貨にまではギザがあることになる。成分については銅950、亜鉛40、鉛10の比率による合金である。

3-Ⅱ区は北半部は小ピットが30数個あったのみである。南端部の農道を残した所での土層を見ると、黄灰色砂礫土（花崗岩ばいらん土）の地山の上に灰黒色砂礫土・黒色土・黄褐色土・茶褐色粘質土が順に堆積して、その上が黒色の耕作土となっている。遺物は全くない。

3-Ⅲ・Ⅳ区は用地界で区分けしていたが、表土を全て除去したら分けにくくなってしまった。Ⅴ区との間には用地界の直下に浅い溝があったので分けられる。Ⅲ区のⅤ区寄りに須恵器を副葬した土壌墓（D1）が1基あったのみで他にはⅢ・Ⅳ区ともに性格不明の不整土壌と小ピットがいくつか存しただけである。遺物は全くなかった。

3-Ⅴ区はⅥ区とは明確な区分の地境等はなかったが、用地内で表土を反転したときの境目で区分した。北端部には東に広がる孟宗竹の林があり、旧地形を保っていると観察された。そこには甕棺墓群・土壌墓群・祭祀遺構などが検出されたが、殆んどが新しい時期の溝に切られていた。甕棺墓は9基あって弥生中期前葉～中頃の所産である。祭祀遺構は1基しかなく弥生中期中頃と思われる。土壌墓はⅢ区のD1と同じく8世紀初頭を前後する時期であろう。これらの遺構配置の状態からこの埋葬墓群の中心は東の方に広がるものと考えられたが、やがて小郡市教育委員会が昭和57年に調査を実施してその全容が明らかとなった。

Ⅵ区に近い方になると畑地造成の際のパワーショベルによる浅い溝が東西－南北に入り乱れて走っている。また8～9mの間隔で土壌が3基（4～6号）検出された。甕棺と祭祀遺構出土の上器以外には、パワーショベルによる攪乱土の中から磨製石剣の切先片が出土している。第2図O-S₁がそれで、先端及び側面刃部には欠損部分がある。研ぎ直しがなされているために鍔は身の中央でなくやや片寄って走る。先端部に近く表裏ともに粗い条痕のような擦過痕があるのはなぜかわからない。現存長5.1cm、最大幅2.5cm。凝灰岩製。



第2図 千潟遺跡出土石器・金属器実測図（1/2）

3-VI区はVII区に近い方に土墳墓が1基存したほかは、木の抜き跡や畑地造成時の浅い溝などがあってはしっかりした遺構らしいものはなかった。北端部にある円形ピット内から打製石鏃が、南端の方の遺構検出時にサヌカイト・黒曜石の破片が出土しているのみである。VII区とは農道で距てられていたが、その直下には溝があった。

第2図O-S₃が北端の円形攪乱土墳から出土した打製石鏃である。サヌカイト製で幅3.1cmを測る。

3-VII・VIII区は農道で分けたが、農道の直下にも住居跡があったのでまとめて記す。ここには北端部に土墳墓6基と掘立柱建物跡2棟があり、中ほどから南端にかけて竪穴住居跡7軒が存した。住居跡の周辺にはピットが多数あったけれども、建物としてのまとまりは見られなかった。これらの遺構は第一次調査の北端からの延長上にあるものとして捉えられる。VIII区の遺構検出時に黒曜石製の打製石鏃1点が出土している。第2図O-S₃がその石鏃で、全長2.4cm、最大幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.0gを測る。漆黒の黒曜石を素材とする。

以上述べきった3-I~VIII区の遺構を性格別にまとめると次のようになる。

生活遺構——竪穴住居跡7軒（VII・VIII区；7世紀前半～後半）

掘立柱建物跡2棟（VII区；7～8世紀）

土墳

ピット

墓地関連——変棺墓9基（V区；弥生中期）

土墳墓9基（III・V区3基；7～8世紀、VI・VIII区6基；弥生）

祭祀遺構1基（V区；弥生中期）

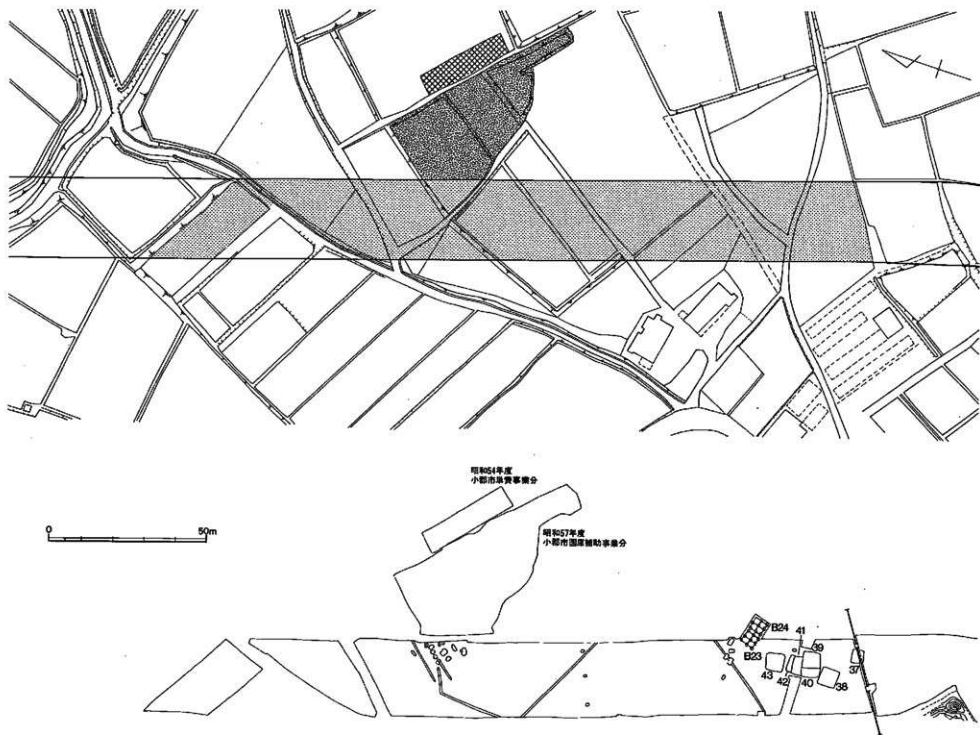
その他——おとし穴4基

溝状遺構

以下においては、主たる遺構としてのIII・V区の墓地と土墳、VI・VIII区の墓地・住居跡群を説明する。他のI・II・IV区については叙上の説明でもって別に触れない。

（註）中村佐伝治『日本のコイン』カラーブックス222 保育社1971

この項の10円硬貨については、日本銀行福岡支店に問い合わせて種々御教示を得た。



第 3 図 千瀬遠路 第三次調査全体図 (1/1,200)

B. 生活遺構と遺物

竪穴住居跡 7 軒と掘立柱建物跡 2 棟それに土壇や多数のピットがある。ピットはⅦ・Ⅷ区に密集しているけれども 2 棟の建物以外にはほとんどのものを見出せなかった。干潟遺跡の集落そのものは、第一・二次調査の結果と照らし合わせても 23・24 号掘立柱建物跡のあたりを北限としていると考えてよいだろう。

1. 竪穴住居跡 (図版 1, 4, 付図 4)

Ⅶ・Ⅷ区に 7 軒が検出された。37・38・42 号の 3 軒は単独であるも他の 4 軒は重複している。その先後関係は、(古) 42→41→40→39 (新) となる。占地のあり方からみて、38 号と 39・40 号、42 号と 43 号はそれぞれ同時併存はないとみてよいだろう。7 軒ともに方形のプランを呈し、4 個の主柱穴がある。全てカマドを有し、それらは屋内での造りつけであって突出型のものはない。以下の記述のうち、出土遺物についての出土部位における数字は数えた個体数を示している。

37 号住居跡 (図版 5, 第 4 図)

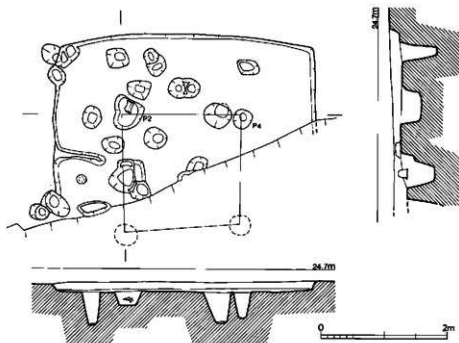
西にカマドを持つ方形プランの住居跡であるが、第 1 次調査と今次の調査との境界にあったため工事によって約半分を削平されてしまっていた。現存部分の面積は 8.55㎡。カマドが西辺の中央にあったとすれば復原して約 4.5×4.2m で 16.95㎡ くらいの規模であったことになる。これは第三次調査の中の 7 軒のうちで最も小さい。カマド中心を通る主軸は N-100°-W。検出面から床面までは 15cm 程の深さしか残存しない。主柱穴も 2 本しか残っておらず、P2・P4 は床面からの深さが各々 21cm・49cm を測る。

カマド 西辺にあり、両袖間が 85cm、奥行 75cm を測る。左袖は半分が倒れてしまっている。燃焼部中央に土師器の甕を倒立に置いて支脚としていた。

出土遺物 (図版 18・21, 第 5・6・18 図)

カマド支脚に土師器の甕 (10) が使われているのと、P2 内に土師器甕の破片 (13)、そして床面上に同じく土師器甕の破片が存した以外は、埋土中から破片として次のものが出土した。須恵器の坏蓋 3・坏身 1・甕 2・高坏 2・甕 5、土師器の甕 11・かまど 1・土製品 1、陶器片 1、石製紡錘車 1。

須恵器 1～3 は坏および甕の蓋、4・5 は高坏、6・7 は甕の破片である。1・3・5 は復原

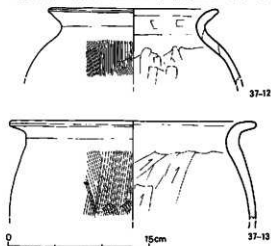


第 4 図 37号住居跡実測図 (1/60)

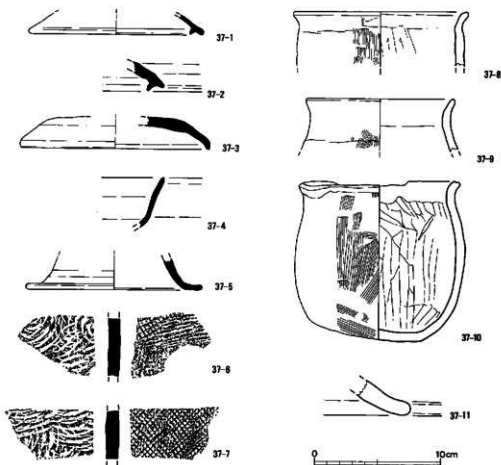
で径が各々14cm, 14.8cm, 14cmを測る。6・7は38号住居跡出土の甕の破片(38-4)と接合しないが同一個体であると思われる。全て埋土中の出土である。

土師器 10はカマド内の支脚としていたもので完形品である。口径12.8cm, 器高12.9cm。8・9・12は埋土中に存した破片で、復原しての口径は8が14.0cm, 9が12cm, 12が18.1cmを測る。13はP2から出土している。復原口径26.3cmとやや大型の甕である。肩部外面に椶の圧痕(というよりは粘土中に入りこんでいたもの)が1個見られる。11は移動式かまどの底かまたは椶部分の破片と思われる。

土製品 (第18図37-M1) 表面にワラのような植物質繊維の圧痕が付いたもので、もとは円盤状をなしていたと思われる。この37-M1は片面のみ圧痕がある。他の類品が黄褐色等の明るい色調なのに、



第 5 図 37号住居跡出土土器実測図② (1/4)



第 6 図 37号住居跡出土土器実測図① (1/3)

これは黒褐色を呈して異質である。埋土中からの出土。

紡錘車 (第22図37-S1) 滑石製で、径が3.8cm、厚さ1.4cm、孔径0.8cm、重さ28.8g。上面には孔を中心としてらせん状に擦過痕と思われる条線が入っている。

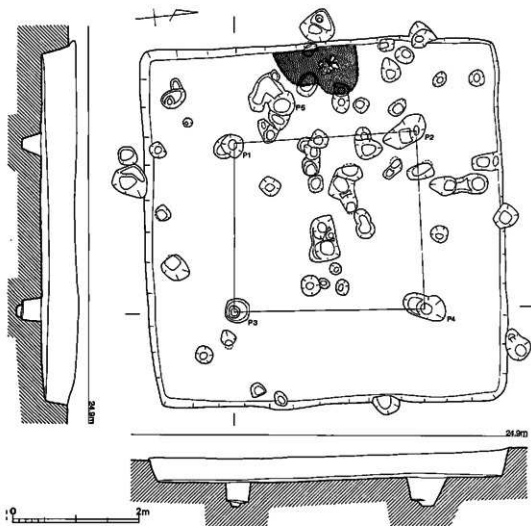
38号住居跡 (図版4, 6, 第7図)

37号住居跡の北西5m程の所にあつて、39・40号住居跡とはきわめて接近している。カマドを西辺中央に置き、その中心を通る主軸方位はN-86°-W。5.65×5.7mの殆んど正方形といつてよいプランで、比較的大型の住居である。面積は29.26㎡。P1～P4の主柱穴を結ぶエリアの面積は8.12㎡。検出面から床面までは約45cmの深さがある。主柱穴の床面からの深さはP1が30cm、P2:42cm、P3:37cm、P4:43cmとなる。カマドのあり方と主柱穴が二段掘りになることからすれば、住居廃絶時にカマドを壊し、かつ主柱4本を抜き去った可能性がある。

カマド 西辺中央にあるが、灰および焼土塊の広がりがあるのみで袖などはすでになかった。住居廃絶時にとり壊したことが考えられる。焼土塊の中に土師器甕がつぶれて存したのは支脚としていたものであろう。

出土遺物 (図版21・22, 第8・9・18図)

わりと多くの土器が出土している。カマドとその周辺からは土師器の甕4・坏1, 土製品1が、床面及びその近くからは須恵器の坏壺1・坏身1, 土師器の甕8・埴1・高坏1が出土している。またP5その他のピット中には須恵器甕1, 土師器甕2・甌1・埴1, 土製品1があっ



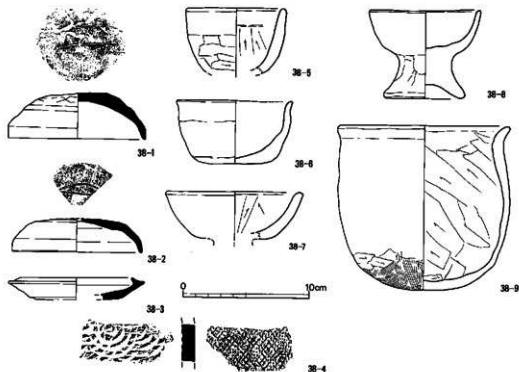
第7図 38号住居跡実測図 (1/60)

た。以上のほかは、埋土中から須恵器坏蓋2、坏身2・高坏1・壺1・甕2、土師器坏1・高坏2・埴7・壺1・甕36・ミニチュア2、土製品2、土鍾1、卵石1が出土した。なお、床面近くからサヌカイト剥片1点も出土している。

須恵器 1は赤焼き風の坏蓋である。外天井部にへう記号をもつ。口径10.8cm、器高3.6cm。床面からの出土。2も外天井部にへう記号をもつが、ここは切り離し後未調整で板圧痕らしきものを見る。復元口径10.4cm。3は立上りのごく僅かな坏身である。外底部にへう記号を持つが小片のため全容はわからない。復元口径9cm。4は甕胴部片で、37号住居跡の出土品と同一個体らしい。2～4は埋土中の出土。

土師器 5・6はぼってりした甕である。5が復元口径8cm。埋土中出土。6は復元口径が9.2cm。ピット内出土。7は底部付近を欠くが8と同じように脚台が付くのだろう。復元口径11cm。床面近くから出土。8は1/4を欠く。本来は化粧土をかけていたらしい。口径9cm、脚裾径6.5cm、器高7.1cm。埋土中出土。9はごく一部を欠するのみでほぼ完形に復した。カマドの焼土内でつぶれていたので支脚としていたものだろう。二次火熱を受けたことが伺える。口径13.8cm、器高13cm。

土製品（図版21、第18図38-M1・M2） 38-M1は粘土の塊に近い感じである。片面は手のひら



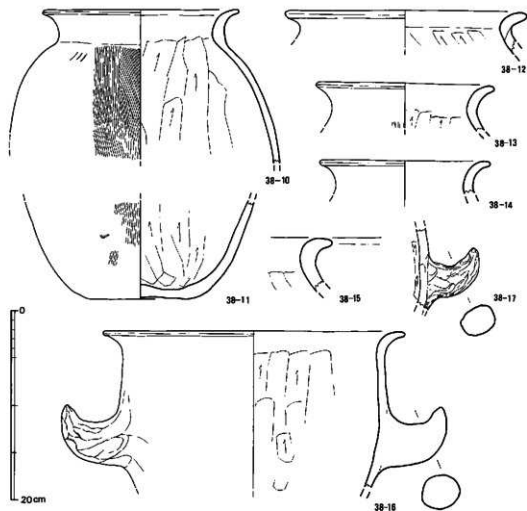
第 8 図 37号住居跡出土土器実測図① (1/3)

にのせて平らにしたような形状をなし、もう片面にはワラのような植物繊維の圧痕がある。埋土中の出土。38-M2は土錘の破片である。現存長3.5cm。断面の殆どしか残存しない。埋土中から出土した。

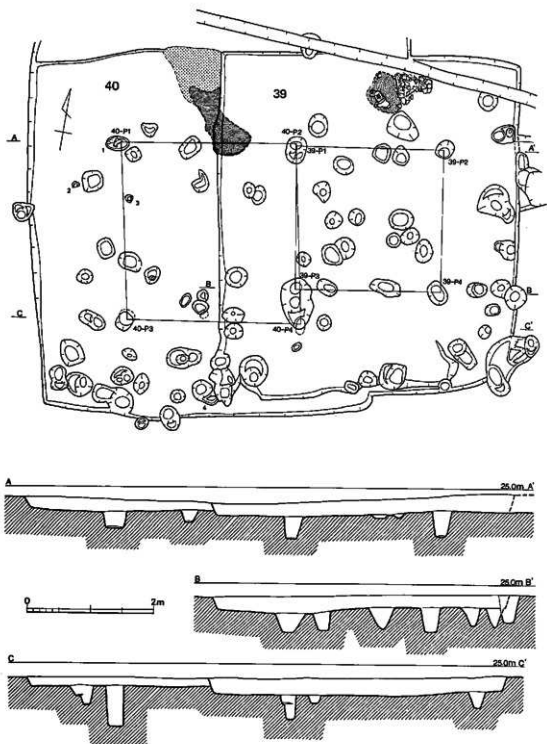
石鐮（図版22、第18図38-S1）直径9～9.6cm、厚さ3.8cmの玄武岩の叩石である。中央部に敲打痕がある。重さ500g。埋土中出土。

39号住居跡（図版6・7、第10図）

38号住居跡の北にあって、40・43号住居跡を切って営まれている。カマドは北辺に付くが、



第9図 38号住居跡出土土器実測図②（1/4）



第 10 图 39·40号住居跡実測図 (1/60)

ちょうど農道の真下にあたり、そこに農業用の導水管が走っていてそれに一部を削られている。5.4×4.7mのやや南北に長いプランとなり、面積24.62㎡。主軸方位N-11°-W。これより古い40号住居跡よりも床面レベルは低くなっている。床面下に掘込みがあった（図示せず）。

カマド 北辺の中央にあるけれども袖などは明確にできなかった。焼土の中に土師器の小型甕と大型甕があり、その周辺に土師器片がつぶれたようにして出土している。この様子からしてカマドは住居廃絶時にとり壊されたものかもしれない。

出土遺物（図版1・19・20・21、第11・12・13・18図）

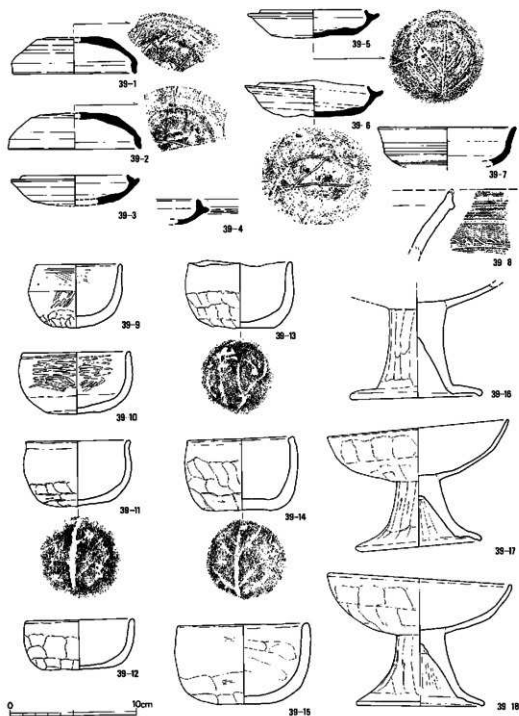
今次の7軒の住居のうちで最も多くの土器が出土している。カマドとその周辺には須恵器の甕1・壺2・高坏1、土師器の甕8が存した。これ以外にはビット内と埋土中から須恵器坏8・埴2・壺7・甕1、土師器坏13・甕9・高坏5・壺3・甕33・ミニチュア2、土製品2が出土している。甕の多いのが目立つ。

須恵器 1・2は坏蓋でともによく似ている。外天井部にはおそらく同じ形のへら記号をもつ。復原にて1が口径9.9cm、器高2.8cm、2は口径10.5cm、器高2.8cmを測る。3～6は坏身で5と6は完形になる。3は1/4程の破片で復原口径8.5cm、同器高2.4cm。外底部は切り離れたままのように見える。4は1/10程の小破片で焼成があまく赤焼き風である。5は底部を見ると粘土紐巻上げにて成形したのがよくわかる。また受部には蓋を被せて焼いた痕跡がある。外底部のへら記号は木の葉の脈のような形をしている。口径10.5cm、受部径8.4cm、器高2.25cm。6は垂みの著しい倒体である。受部には蓋を被せて焼成した痕跡をとどめる。口径10.4cm～11.2cm、受部径8～8.8cm、器高2.9cm。7は高坏の坏部破片で復原口径11cmを測る。体部には3条の沈線が入る。8は甕の口縁部片である。描描波状文はわりときれいに施されている。7のみがカマド周辺からで他は全て埋土中から出土した。

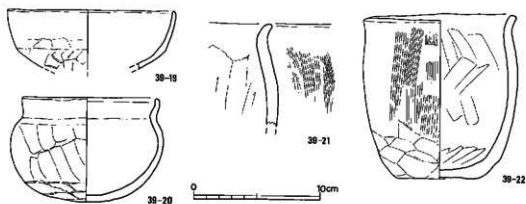
土師器 9～15は小型の甕である。それも10のみが約3/4の破片で他は全て完形になる。9は手づくねのように見える。口縁部の内外は刷毛目風の擦過を行っている。口径6.8cmに器高は5.1cm。10は口縁直下に細い沈線を入れている。内外ともにへら研磨を行う。口径8.6cm、器高4.9cm。11は口縁部が少しすばまってから外反している。外底部には木の葉の圧痕がある。口径8.1～8.7cm、器高5.1cm。12はどっしりした形状をなす。口径8.6cm、器高4cm。13は器表の風化が著しい。外底部には木の葉の圧痕を見る。口径8cm、器高5.3cm。14も外底部に木の葉の圧痕がある。外面の底部付近はケズリを行っている。口径8.4～8.7cm、器高5.8cm。15は埴の中で最も大きい焼成があまく全体にもろい。口径10.3cm、器高6.3cm。全て埋土中から出土した。

16～18は高坏で、3点とも精製土器であり、赤褐色粒子を含んでいる。坏部はケズリとなで、脚部は筒部がケズリ、柄部がなでを施す。16は裾径10.4cm。17は口径14.5cm、裾径10cm、器高9.4cm。18は口径14.5cm、裾径10cm、器高10.5cm。全て埋土中の出土。

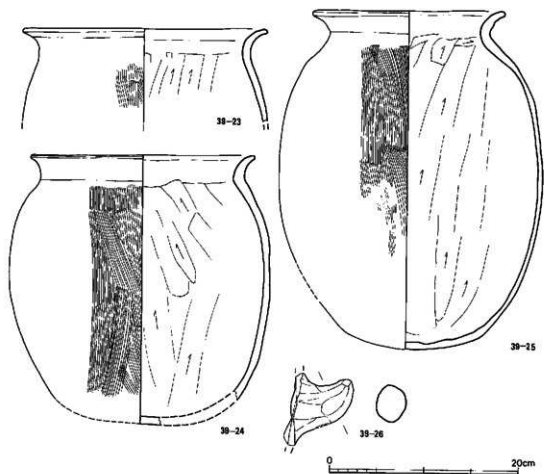
19は坏になるだろう。復原口径13.5cm。精製土器である。20も精製の壺である。口径10.7cm、



第 11 图 39号住居跡出土土器実測图① (1/3)



第 12 图 39号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第 13 图 39号住居跡出土土器実測図③ (1/4)

胴部径12cm, 器高8.4cm。

21・22は小型の甕である。22はカマド周辺から出土した完形品である。二次火熱を受けた痕跡が平たくなった底部付近にあるので、カマドの支脚としていた可能性もある。口径11.2～12.2cm, 器高13cm。23～25は大型の甕となる。23は復原口径26cm。24はどっしりした感を受ける。口径23.8cm, 胴部径27.7cm, 器高28.5cm。25は縦長になる。胴部器壁はわりに薄い。口径20.3cm, 胴部径27.7cm, 器高36.1cm。24, 25はカマド周辺から出土している。26は把手で角閃石を含んでいる。

土製品(図版18, 第18図39-M1) 扁平なもので表裏ともにワラのような圧痕がある。長軸長4.2cm。幅は2.3cmくらいとなろう。埋土中に存した。

40号住居跡(図版6, 第10図)

38号住居跡のすぐ北にあって、南西コーナーの所は20cm程しか離れていない。カマドは北辺の中央にあるが、半分を39号住居跡に切られている。東辺を推定復原してみれば5.9×5.5m程のやや縦長のプランとなり、面積は約30.69㎡となる。主軸方位N-11°-Wは39号住居跡と同じである。

カマド 北辺にあるが、そでのあり方など明確にできなかった。このカマドも意識的に取り壊したのかもしれない。

出土遺物(図版20・21, 第15・16・18図)

あまり多くなかった。カマド周辺に土師器坏1・甕3があり、床面に土師器の脚台1(②)・把手1(③)・甕1(④)、P1に土師器甕(①)があった。埋土中からは須恵器坏2・埴1, 土師器坏1・埴1・高坏1・壺2・甕18・土製品6・土錘1が出土している。

須恵器 1は約1/4の破片の坏身である。外底部にへら記号が見えるも全容はわからない。内底部はなでたあとの指紋がよく残っている。復原口径8.6cm, 受部径11.0cm, 器高3.4cmとなる。埋土中出土。

土師器 2はやや大型の埴の脚台になろう。整形があらあらしい。裾部径9.7cm。3・4は胴のあまり張らない中・小型の甕である。3は二次火熱を受けているように見える。赤褐色粒子を含んでいる。復原口径15cm。4はチョコレートいろに近い色調を呈する。復原口径17cm。5・6は大型の甕である。5は赤褐色粒子を少し含む。復原口径19.8cm。6は赤褐色粒子を多量に含む。7は甕か甗の把手で赤褐色粒子を少し含んでいる。2は第10図中の②, 5はP1内の①, 6は④, 7は③にあたる。他は埋土中から出土した。

ミニチュア(図版22, 第18図40-M1) 1/4程の破片でしかも口縁が若干波状となっているので、口径等の復原にやや不安もあるが大きな差はないであろう。尖底になるらしく、その底部周辺に小孔がある。いま破片に残存している孔は3個しかない。内外ともなでて調整する。

復原口径は4.4cm。埴土中出土。

土製品 (図版21, 第22図40-M2) 半分程の残存と思われる。表裏ともにワラのような圧痕がある。幅2.6cm, 厚さ0.7cm。胎土は精良であって砂粒を殆ど含まない。埴土中出土。

土鍾 (図版21, 第22図40-M3) 一部を欠失するが復原すれば5cmくらいの長さとなろう。最大径は1.4cm。化粧土をかけた痕跡がある。重さ7.75g。埴土中からの出土。

41号住居跡 (図版6, 第14図)

42号住居跡を切り、39・40号住居跡に切られる。南半分は復原して考えるしかないが、ほぼ正方形のプランであったろう。復原で約29.07㎡。主軸方位はN-11°-Wで、北辺にあるカマドの左袖の所が中心線である。なお、P1・P2間の南寄りの床面下に浅い土壌があった。

カマド 北辺につき、両袖間55cm, 奥行70cmを測る。

出土遺物 (図版21, 第15・18図)

あまり多くない。床面とカマド周辺に土師器甕が2個体ずつあったほかは、埴土中に土師器甕6、砥石1、弥生土器片1があった。また床面下の土壌より土師器甕1が出土している。

土師器 1～4とともに中～小型の甕である。1は二次火熱を受けた痕跡がある。復原口径は15cm。2は胴の張る器形になるらしい。赤褐色粒子を含んでいる。復原口径16cm。3はカマド周辺から出土し、二次火熱を受けているので支脚に使われていたものかも知れない。赤褐色粒子を含む。口径14cm。胴部最大径15.2cm。赤褐色粒子を含む。4も赤褐色粒子を含んでいる。3を除いて埴土中から出土した。

砥石 (第18図41-S1) 破損が著しいが、いま3面に使用痕を認める。凝灰岩かと思われる。かなりの二次火熱を受けている。埴土中からの出土。

42号住居跡 (図版6, 第14図)

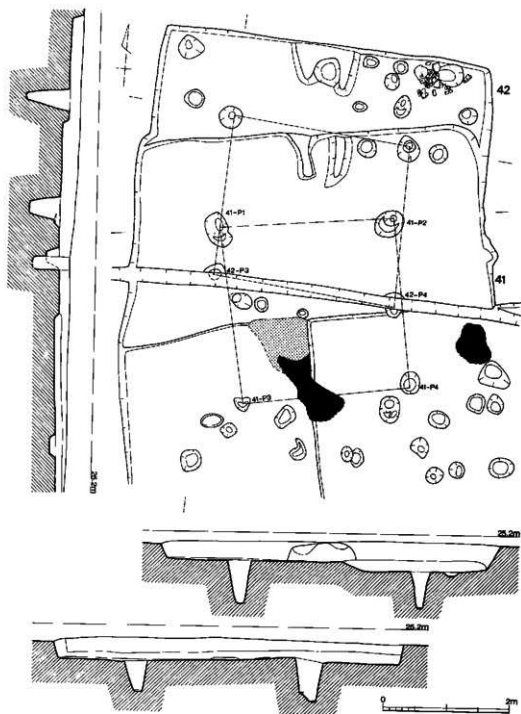
41号住居跡に切れ、ここの4軒のうちで最も古く、床面レベルは最も高い。南側の大半を失うものの、主柱穴4個は確認できる。しかしP3とP4は農業用導水管埋設の溝に切られている。主柱穴配置から復原すれば25.93㎡くらいの面積であったろう。主軸は北辺にあるカマドの中央を通り、N-4°-Wをさす。床面下に掘込みがあった。

カマド 両袖幅60cm, 奥行75cmを測る。カマド本体の上と前面とに焼土の広がりがあった。

出土遺物 (第15・16・18図)

7軒の中では最も少なかった。カマド周辺からは土師器高環1・甕4・土製品2そしてスラッグ1点が出土している。他に埴土中から土師器の環1・高環1・甕9・土製品3が出土した。須恵器は1点も出土していない。

土師器 1～3は小型の、4は大型の甕である。1は復原口径10.8cmとかなり小さめである。口

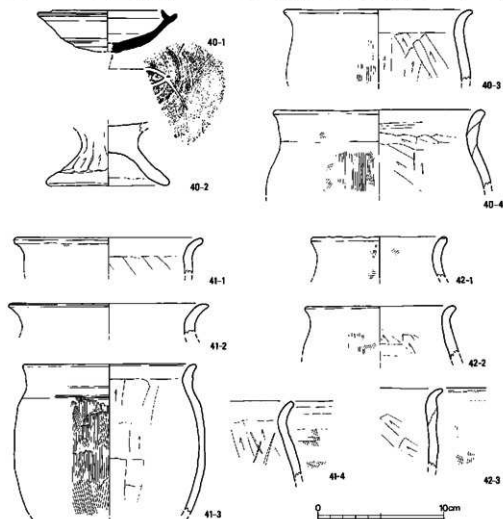


第 14 图 41・42号住居跡実測図 (1/60)

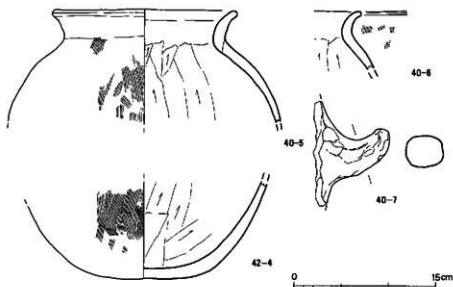
縁上端に刻み口ではないが押えてくぼんだ所がいくつかある。2も復原口径12cmと小ぶりである。二次火熱を受けたあとがある。3はカマド周辺からの出土で二次火熱を受けているので、あるいは支脚としていたものの破片かもしれない。口縁直下が少し膨らみを持っている。4は底部の破片である。1・2は埋土中、4は北東隅から出土した。

43号住居跡（図版6・8、第17図）

42号住居跡の北1m程の所にあり、カマドを北辺におく。一辺5.5mのほぼ正方形に近いプランとしてよいが、北辺のカマドをその東側の所が幅2.5mにわたって約50cmばかり張り出している。これがどのような機能を持つのかわからない。面積は27.23㎡。主軸方位はN-3°-W。主



第15図 40・41・42号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 16 図 40・42号住居跡出土土器実測図 (1/4)

軸はカマドの右袖上を通る。またP3とP4の間の床面下に結果として3個ほどが連結した形状の掘込みがあった。

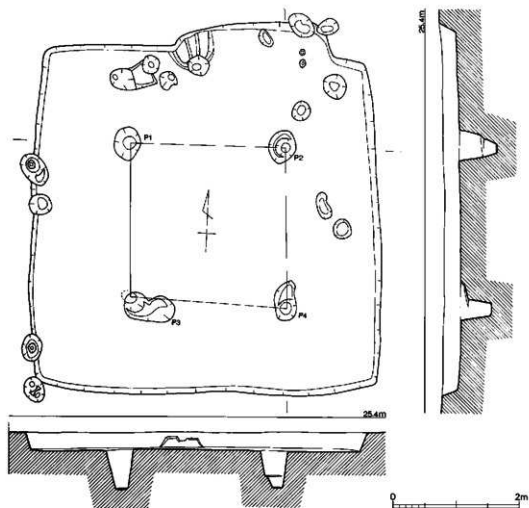
カマド 北辺にあって袖の残りは狭小である。両袖間35cm。奥行50cm。

出土遺物 (図版20・22, 第18・18図)

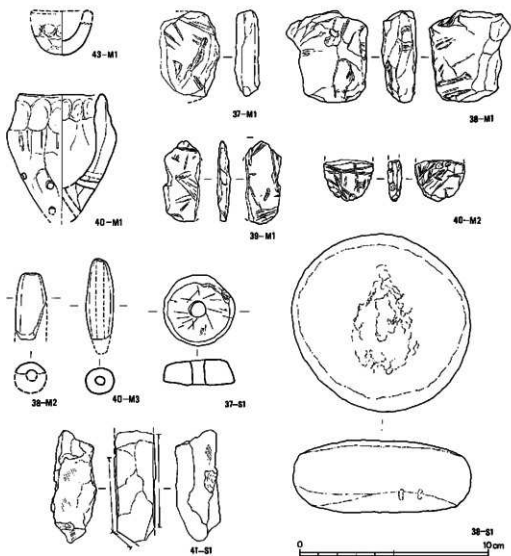
あまり多いとはいえない。カマド周辺に土師器埵1・甕4・弥生土器片1があり、埋土中からは須恵器坏蓋1・坏身3・平瓶1, 土師器坏1・埵4・甕13・ミニチュア1・土製品1, 弥生土器片1が出土した。

須恵器 1の坏蓋は復原口径11.2cm, 同器高3.2cm。磨滅が著しい。2は3に比べて立上りがやや高い。受部の所を見れば蓋をして焼成したことがわかる。復原口径10.1cm, 受部径12.2cm。3は焼成があまく磨滅著しい。復原で口径10.4cm, 受部径12cm, 器高2cm。4は壺とするよりは平瓶の口縁部と思われる。復原口径7.8cm。1～4ともに埋土中の出土。

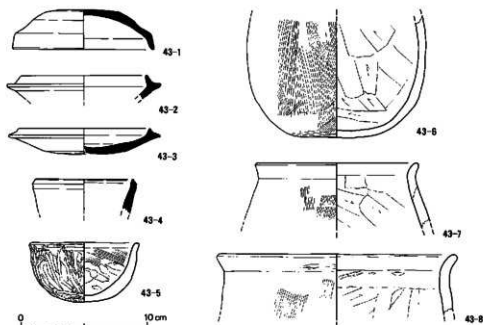
土師器 5の埵は完形で、器表面の凹凸が著しい。外面はへう磨きを施す。手づくねをきれいに調整したものである。全体にこげ茶色の色調をなす。口径8.8cm, 器高4.7cm。6はカマド周辺の出土で二次火熱を受けているので、もと支脚に使用していたものか。底部に安定感がある。7は胴部の膨らむ甕で復原口径13.0cm。8は復原口径19.0cm。6以外は埋土中から出土している。ミニチュア (図版22, 第18図43-M1) 口縁部を欠くがおおよそ旧形は察知できる。口径3.3cm, 器高2.4cmくらいのものであったろう。指などで押えのあとが著しい。



第 17 图 43号住居跡実測図 (1/50)



第 18 図 干潟遺跡壁穴住居跡出土土製品・石器実測図 (1/2)



第 19 図 43号住居跡出土土器実測図 (1/3)

2. 掘立柱建物跡

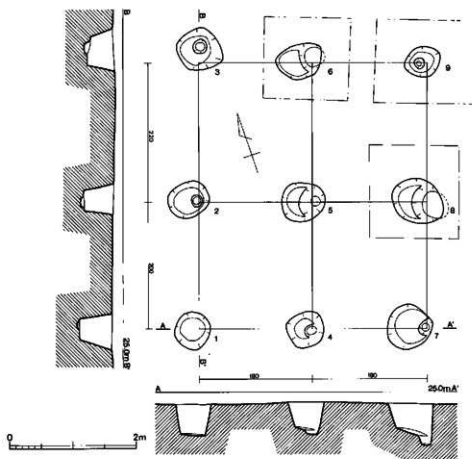
43号住居跡の北5mの所に23号掘立柱建物が、そのすぐ東に24号掘立柱建物があった。この2棟はごく僅かながらも（4度）柱筋がずれているので、同時に存したとは考えないがよいだろう。当初23号建物の約半分は調査区域外にあったので本来の規模を知るために地権者の承諾を得て、東側部分の予想される箇所をグリッドを設けて発掘した。その結果が2棟の検出となったものである。

23号掘立柱建物跡（図版8、第19図）

2×2間の総柱の建物である。梁行は心間200cmと220cmで420cmとなり、南北方向にやや長い。主軸はN-19°-E。柱穴の掘り形はみな円もしくは楕円形のプランで直径50～85cmの大きさである。6と8の柱穴を除いて柱痕と同じ大きさの小ビットが柱穴底に存する。それによると柱の大きさは直径15cm前後であったことが伺える。柱穴内からの出土遺物は殆んどない。

24号掘立柱建物跡（第21図）

23号建物のすぐ東にある。23号と同じく2×2間の総柱の建物となるが、なぜか9にあたる柱穴は検出できなかった。3と6の柱穴は他の6個と違って二段掘りとなっているので、ある

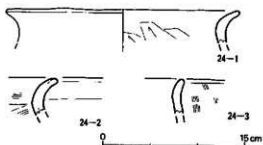


第 20 図 23号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

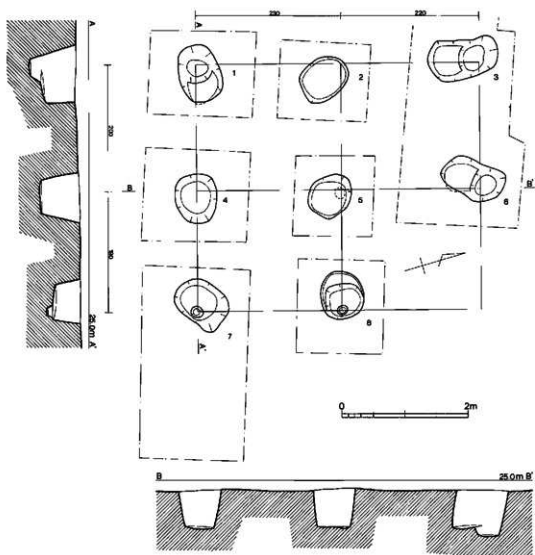
いは3と6を除いた残り6個の柱穴による1×2間の建物の可能性もあるが、いまは2×2間と考えておく。梁行は200cmと190cmで390cm、桁行は220cmと230cmの450cmとやや南北方向に長い。主軸はN-15°-E。5・7・8の3個の柱穴で知られる柱の大きさは直径12cm前後である。柱穴掘り形は3と6を除いて直径65～90cmの円形もしくは楕円形プランをなす。

出土遺物 (第21図)

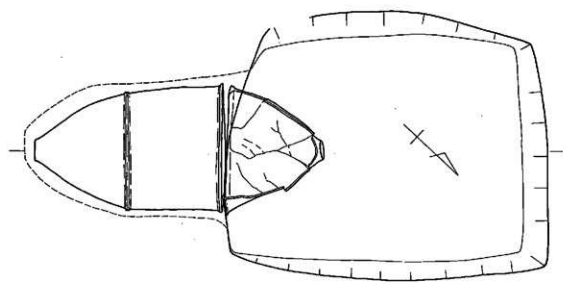
少量の土器片があるが土師器ばかりである。1は復原口径25cmになる甕の小片である。外面と口縁内面上端部に化粧土がかかる。2は1とよく似た断面形態の甕である。3は小型の甕になろう。外面に刷毛目が残る。



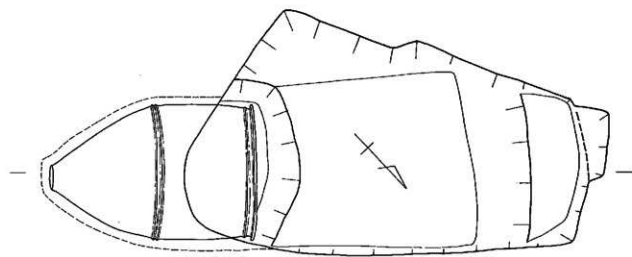
第 21 図 24号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)



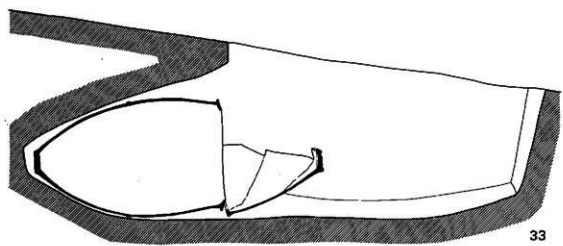
第 22 图 24号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



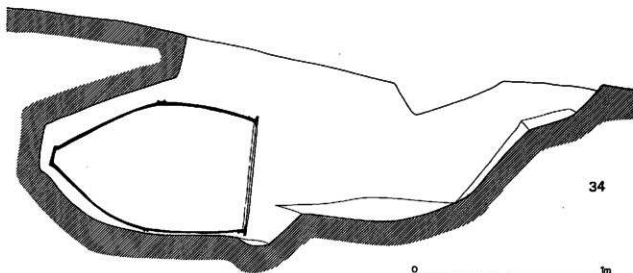
24.3m



24.3m



33



34

0 1m

第 23 图 33・34号墓棺基平面图 (1/20)

C. 墓地及び関連遺構と遺物

III・V区に甕棺墓9基・土塋墓3基と祭祀遺構1基が（これらをA群とする）、VI・VII区に土塋墓6基が（これらをB群とする）あった。甕棺墓・祭祀遺構は弥生中期であり、土塋墓はIII・V区の3基については7～8世紀、VI・VII区の6基は弥生時代のものであろうと考える。

1. 甕棺墓（図版9、付図5）

V区にて成人用6基、小児用3基を調査した。明るい茶褐色土を掘り込んで墓墳を穿ち黒色土が埋土となっている。これらより西の方には墓地の広がりが見られないので、残る東の方に広がっているであろうことが予想されていた。結果として小郡市教育委員会が1982年に調査して甕棺墓32基その他を検出している。

なお、IV-Aで触れておいたように、調査時にK1～K9としていたものを小郡市教育委員会調査分からの連続したものとしてK33～K41とする。K33～K36とK41は新しい時期の溝に墓墳を切られている。

甕棺については各個体とも焼成はおおむね良好で、胎土中に砂粒を多く含み黄褐色を呈するという共通点があるので、特色ある点のみを説明することとする。

33号甕棺墓（図版10、第23図）

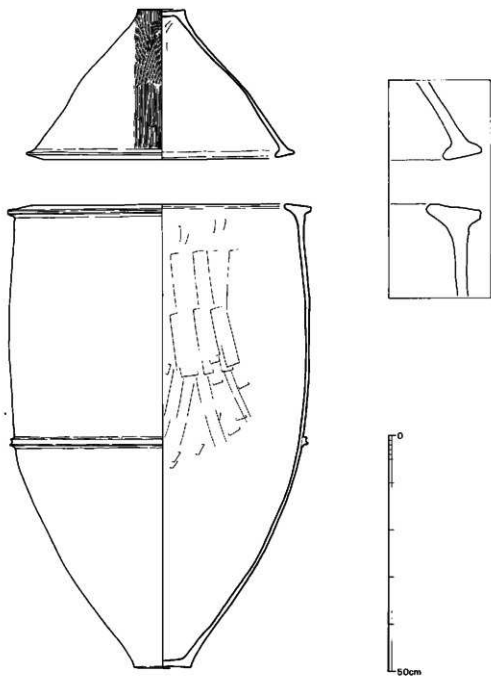
9基の中で北東端に位置する成人用甕棺墓である。墓墳は170×140cmの胴張り風り長方形プランでその南短辺に甕埋置用の横穴を穿っている。そこに甕を殆んど水平に近い角度で埋置し（約2.5度）、鉢形の蓋を接口式に置く。総長153cm。主軸方位はS-43°-E。

上甕（図版23、第24図）鉢形をなす。口径57cm、底径10.5cm、器高32cm。胴部中位がやや膨らみを持つ。外面は縦刷毛目、口縁内外は横なで、内面はなでを施す。内底部付近に工具痕らしき条線がある。金雲母片、赤褐色粒子を胎土中に含む。

下甕 円筒状と称してよいような形状である。口径61.2～66.7cm、底径12cm、器高99.3cm、胴部最大幅63.6cm、口縁はT字形をなし内側への張り出しが大きい。胴中位にはM字状突帯を貼りつける。内外ともなでにて最終調整を行っているが、内面には木片によるものかと思える擦過痕が見える。金雲母片と赤褐色粒子を少量含む。外面底部と口縁部に黒斑がある。

34号甕棺墓（図版10、第23図）

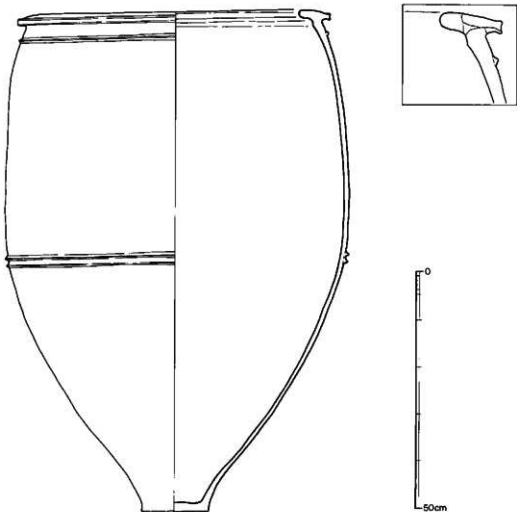
K33のすぐ西隣りにあり、埋置方向もほぼ同じである。長方形プランの墓墳は二段掘りとなり、甕を埋置する所は更に一段低くなっている。甕は1個のみであり、埋置した口縁付近が溝



第 24 图 33号铜镜实测图 (1/8)

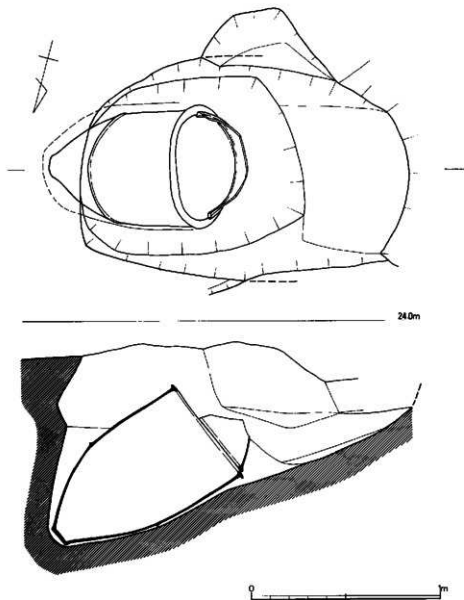
状にくぼんでいるのは板材か何か有機質のものを蓋としていたのだろう。甕は底部の方が高く埋置されており、傾斜は約5.5度を測る。主軸方位はS-48°-E。成人用。

下甕(図版23, 第25図) 胴部中位に最大径がきて口縁部がやや内傾しすばまったようになるので、全体に丸みを帯びた形状をなす。口縁は断面T字形をなし、直下に断面三角形の突帯を貼りつける。胴部には二条の断面三角形突帯がある。底部から胴部へはすぐに開いて移行するのではなく、ほぼまっすぐに立上ってから外上方へ開いてゆく。そのぶん全体から見れば底部が急激に収斂されたようなプロポーションとなる。口径64~69.5cm, 底径14.2cm, 胴部最大径73cm。



第 25 図 34号甕棺実測図 (1/8)

内外ともになでにて平滑な器表面となる。全面ではないが内外に黒塗りの痕跡を認める。石英・長石粒をかなり多く含み、赤褐色粒子も多い。金雲母片は少量が混じる。口唇部と胴部に黒斑がある。



第 26 図 35号壺棺墓実測図 (1/20)

35号甕棺墓（図版11、第26図）

K34のすぐ西にあり、そのK34に向かって埋置した如き方向をとる。墓域はやや丸みを帯びた形状をなすが、本来は長方形プランであったと思われる。やや傾斜をもった埋置となり、35度の角度をなす。主軸方位はN-75'-E。上甕は鉢形の上器を使用しているが約半分しか残っていない。接口式にて埋置する。成人用。

上甕（図版23、第28図） 鉢形をなす。口縁は丁字形をなし胴部がやや膨らみを持っている。復原口径62cm。赤褐色粒子を含み全体に赤褐色の色調を呈する。角閃石も少し含む。

下甕 K33によく似たプロポーションをなし、胴上半は円筒状と称してよいほどである。胴部中位よりやや下方に断面三角形の突帯一条を貼りつける。底部は僅かに上げ底となる。口径63.5cm、底径12.6cm、器高95.9cm、胴部最大径62.5cm。内外ともになでにて平滑にするが、内面には木片の木口痕と思える圧痕が多数見られる。外面の突帯より上位と、内面の口縁下12cm程までを黒塗りした痕跡がある。また底部・体部上位と口唇部に黒斑を見る。金雲母片少量を含む。

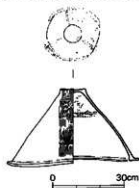
36号甕棺墓（図版11、第29図）

K35の西にあり、それとは主軸が直交するような方向に埋置されている。墓域はかなりの長方形プランで二段掘りになっているが、東側の一部を3号土壌に切られている。埋置傾斜は28度。主軸方位はN-13'-W。接口式にて総長138cm。成人用。

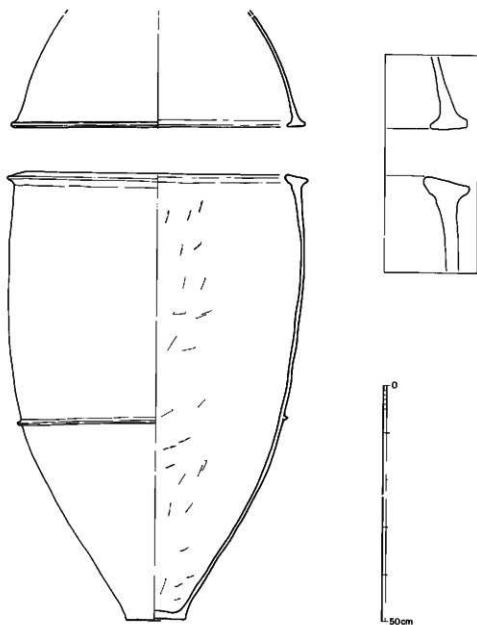
上甕（図版24、第27・30図） 鉢形をなす。口縁部は鋤先状となり、K33・K35・K37の上甕とはやや趣を異にする。外面は縦方向刷毛目がよく残り、内面はなでを施す。口径54~57.8cm、底径11cm、器高32cm。

この土器で注目すべきは、内底面より10cm程の所に丹塗りの円弧が見られることである。この円弧は二条の線が入ったように見えるが、実は二本間の白くなった所には粘土がこびりついているのであって、もともと一本の幅広い線である。この直径約23cmになる円弧からは内底面に向かって3条の丹の筋（帯）がのびている。またこの円弧より口縁部側の器内面の所々に丹の飛沫が見られる。これを解釈するに、このK36上甕を正立にして置いたあと、その中に口径23cm前後になる土器で既に口縁部に丹塗りを施したものを逆さに置いて、その別の部分に更に丹塗りをを行った結果として生じた痕跡とする。そうすれば、丹塗りの円弧や粘土のこびりつき、そしてまた内底面へ流れ落ちた丹の帯、さらには内面に飛び散った丹の痕跡のあり方が納得できる。

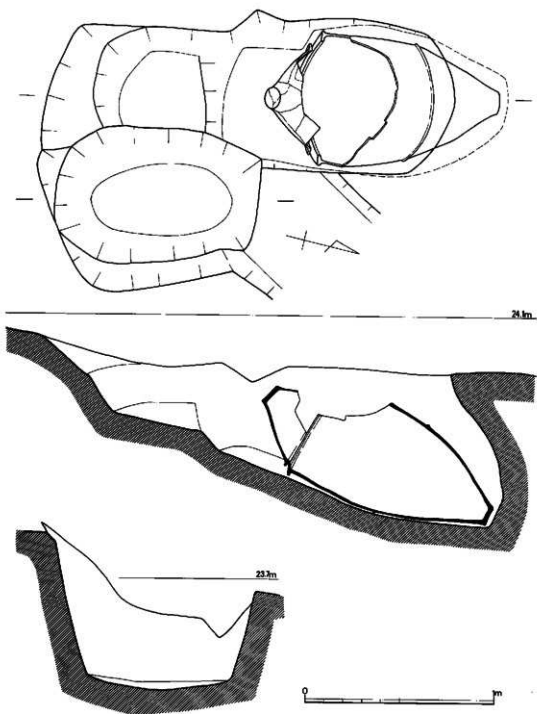
下甕 口径のわりに器高がやや高いためすらりとした砲弾形を



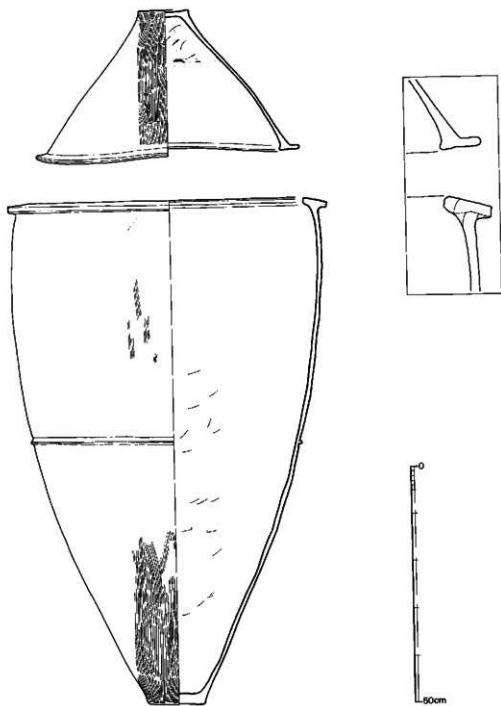
第 27 図 36号甕棺上甕内丹塗り部分図 (1/16)



第 28 图 35号甕形青铜器 (1/8)



第 29 图 36号墓棺基实测图 (1/20)



第 30 图 38号墓棺室测图 (1/8)

している。口縁はその断面で見ると、やや外反した端部にT字形に別の粘土帯をのせていることがわかる。胴部にある断面三角形の突帯は貼りつける際にその上下をよく押えつけているため、少しめりこんだように見える。底部はかなりの厚みがある。外面は刷毛目が残し、内面には木片の木口痕がある。口径62~71cm、底径12.4cm、器高107.7cm。金雲母片も多量に含む。底部・胴上位・口唇部の一部に黒斑がある。

(註) 岩瀬正信氏の御教示による。氏は高坏が最も適当な土器であろうとする。

37号甕棺墓 (図版12, 第31図)

K35の南方にある。墓壇は長径155cm、短径125cmのはほぼ楕円形と言ってよいプランで、その東壁方向に横穴を穿っている。上甕は鉢形の土器である。埋置角度は下甕の方がごく僅かながら高く(1度)になっている。接口式にて合せており総長140cmを測る。主軸方位はS-67°-E。下甕内に少しの歯とほろぼろになった骨が遺存していた。成人用。

上甕(図版25, 第32図) 鉢形の土器である。口径63~70cm、底径10.8cm、器高35.7cm。内外ともなでにて平滑にする。赤褐色粒子を多量に含むが黄褐色を呈している。

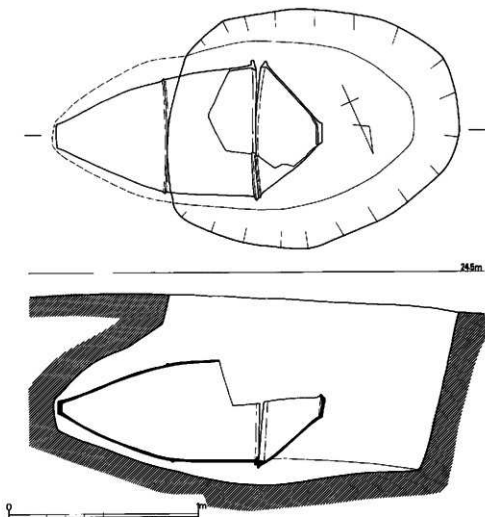
下甕 底部からまっすぐに口縁部までのびた砲弾形のプロポーシオンをなす。全体にひずみがでていて口縁はかなり変形する。胴部の断面三角形突帯の周囲は貼りつける際にかなり強く押えつけている。底部はかなり分厚い。口縁の上面数カ所に猫の足跡のような押圧痕が見られるけれども何のものはわからない。器体の割れ具合を見ると最低6~7cmの粘土帯を積み重ねて成形したことが伺える。外面はなでのあと化粧土をかけているらしい。内面は木片による擦過のあとなどでている。赤褐色粒子を含む。

38号甕棺墓 (図版12, 第33図)

K33の南東にて、それとはほぼ直交する方向に埋置された小児棺である。墓壇は約120×50cmの整然とした長方形プランをなしており、二段掘りとなる。その北東側短壁に直交ではなくやや隅に寄って横穴を穿ち、9度の傾斜で下甕を低く埋置する。墓壇の長軸はN-49°-Eを示すも、甕棺自体の主軸はN-60°-Eとなる。上甕に鉢、下甕に甕を用いて接口式にて埋置する。上下ともに少しも割れた所はなかった。上下合わせて56cm。遺物整理の際に上甕が行方不明になってしまった。

上甕(図版25, 第34図) 前述のとおりで図示しえないが、鉢形の土器であって実測図から判ずるに、口径28cm、底径11cm、器高28cmほどの大きさである。

下甕 逆L字形の口縁をなし、胴部上位がやや膨らんだ形状をなす。底部はわりと厚みがあり、どっしりとした感を受ける。外面は縦方向の刷毛目、内面はなでにて調整する。外面と口縁上端部に化粧土をかけている。赤褐色粒子・金雲母片を含む。口径30.5~34cm、底径8.5cm、器高37.8cm。



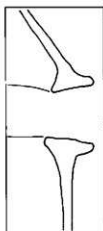
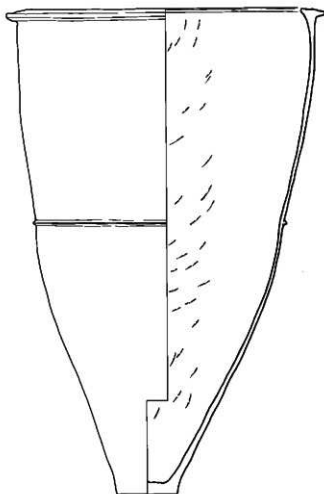
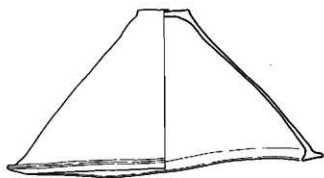
第 31 図 37号甕棺墓実測図 (1/20)

39号甕棺墓 (第35図)

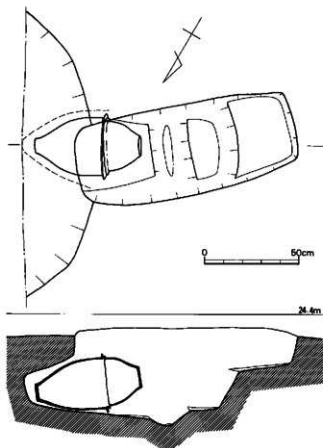
K38のすぐ南にある小児棺であるが、墓墳も棺そのものも破壊されている。墓墳はN-35° - Eに主軸をとる長方形気味のプランになる。棺は甕胴部破片の一部が残存するのみで、詳細はわからない。時期的には他の甕棺と同じく弥生中期前半と考えてよいだろう。

40号甕棺墓 (図版13、第35図)

近時の溝とK41の墓墳に大半を切られて墓墳も棺もごく一部しか残っていない。残存部の墓



第 32 图 37号墓棺夹测图 (1/8)



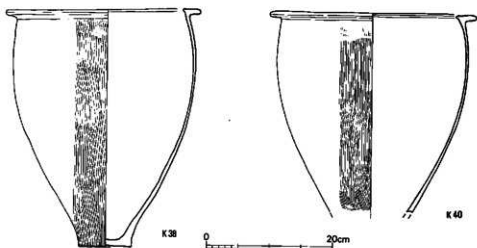
第 33 図 38号変棺墓実測図 (1/20)

墳底面はかなりの傾斜をもっている。小児用で単棺はまず考えにくいので、もう1個あったと思われるが、残っているのが上・下いずれの棺であったのかわからない。

・妻(図版25, 第34図) 逆し字口縁をなす。外面は刷毛目, 内面はなでにて調整する。外面と口縁上端に黒塗りの痕跡を認める。赤褐色粒子を含んでいる。復原口径33cm。

41号変棺墓 (図版13, 第36図)

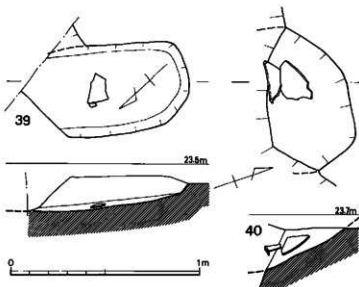
今回調査の変棺墓群の中で最も南に位置する。近時の大きな溝に切られており、棺そのものは上甕である鉢の一部が残存するのみである。墓壇は残存部から判断して長方形に近いプランを呈していたと思われる。棺は西壁を穿って埋置され、下甕を入れこんだ横穴の最も奥の所がかろうじて少し残っていた。また棺を埋置するのに墓壇には二つの階段があり、三段めに棺がくる。このことと上甕の残存位置とからすれば上下合わせた棺の全長は140cm前後であったと思



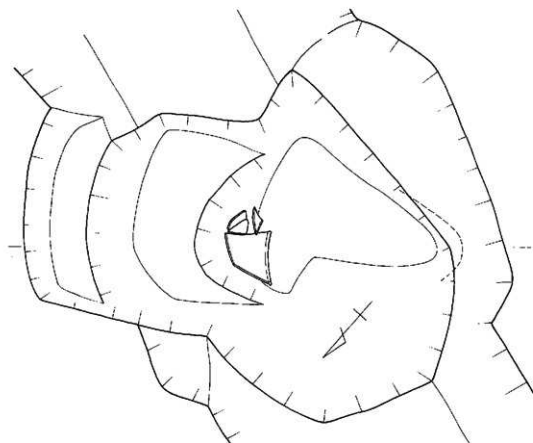
第 34 図 38・40号甕棺実測図 (1/6)

われる。墓墳の主軸方位はS-49'-W。

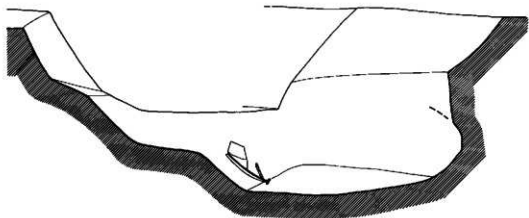
上甕(第37図) 鉢形をなす。口縁部断面の形状にやや特徴がある。口縁から底部へはほぼ一直線にのびる。外面は刷毛目、内面はなでにて調整を行う。赤褐色粒子・金雲母片・角閃石を含んでいる。復原口径51.1cm。



第 35 図 39・40号甕棺実測図 (1/20)

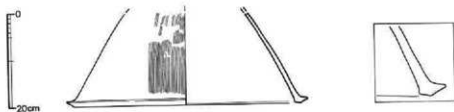


24.8m



0 1m

第 36 图 41号墓棺墓室测图 (1/20)



第 37 図 41号墓棺実測図 (1/8)



Fig. 2 調査風景②

2. 土墳墓 (図版22、第49・50図)

III・V区のA群に3基(D1～D3)、VI・VII区のB群に6基(D4～D9)があった。前者はD1に7世紀末～8世紀初頭の副葬土器があることから、他の2基もD1と同じ頃のものではないかと考える。これらは甕棺墓群の中に点在している格好である。後者についてはVI・VII区の集落の北端部にあり、僅か6基ながらも二つの列をなしているかのように占地している。これらは時期を判じうる出土遺物が全くないが、構造からみて弥生時代の所産であろうと考えている。

a. A群 (図版9、付図5)

1号土墳墓〈D1〉 (図版14、第39図)

III区の東端でV区墓地群の北にある。内法で長軸173cm、短軸46～52cmを測る。南西側の小口幅がやや広くかつ床面レベルが高くなっていること、また土器があることからみて頭位はこの方向であったと思われる。主軸方位S-36°-W。南西小口壁より20～30cmの所で、床面より10余cm浮いて斜めの状態にて須恵器の蓋が出土した。

本体たる身の境はなかった。

出土遺物 (図版20、第38図)

須恵器の蓋である。ごく一部を欠失するもほぼ完

形としてよい。口縁端部は鳥嘴状となっているが細くて高さがある。全体に薄手のつくりと言えよう。

撮みは中央部が高く盛りあがっている。口径15.4cm、

器高2.0cmで、撮みの径は2.6cm。



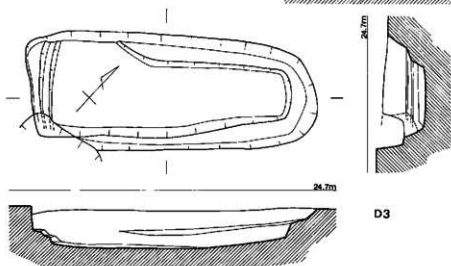
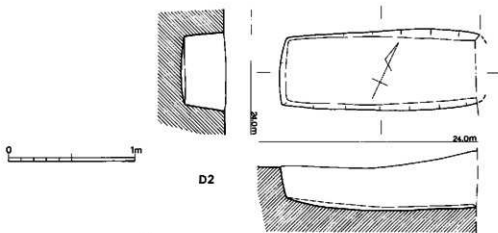
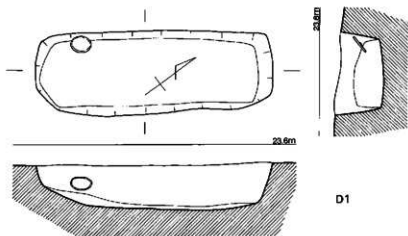
第38図 1号土墳墓出土土器実測図(1/3)

2号土墳墓〈D2〉 (第39図)

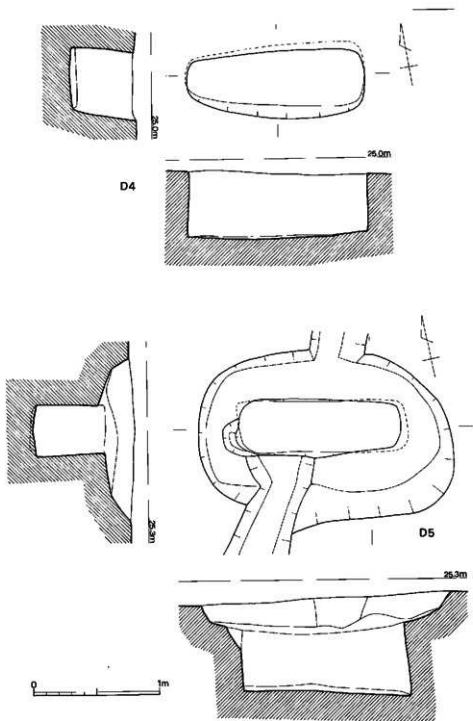
V区のK1のすぐ北側にある。東小口部は調査区域外にかかっているが、残存部の内法長軸長151cmからすればもうそれほど長くは伸びないであろう。短軸幅46～51cm。床面にて西側がほんの少しながら幅広いのとレベルが高くなっているのからみて、こちらが頭位であろう。主軸はS-65°-W。出土遺物はなかった。

3号土墳墓〈D3〉 (図版14、第39図)

V区のK39とK40の間にある。一見二段掘り風だが整然としたものではない。上段にて長軸230cm、短軸80～95cm、最下段の床面にて長軸187cm、短軸35～50cmとなる。頭位は南西側であろう。この頭位側の床面北側が広がっているのは何故かわからない。出土遺物なし。



第 39 图 1~3 号土坑墓实测图 (1/30)



第 40 图 4・5号土坑基实测图 (1/30)

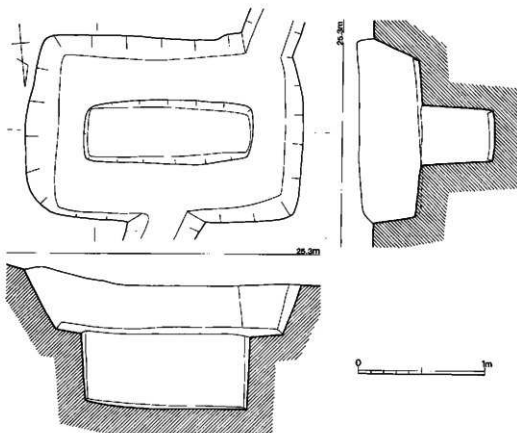
b. B群 (図版15, 付図4)

4号土墳墓〈D4〉 (第40図)

VI区南端にある。この一基のみ他の五基とやや離れて存する。内法にて長軸144cm, 短軸は30~50cmを測り, 東小口側がかなり広い。深さは検出面より53cm。北側から西側にかけては壁面がやや内傾している。主軸方位S-81°-E。出土遺物なし。

5号土墳墓〈D5〉 (図版16, 第40図)

VII区北端近くにあり, D6とはほぼ並行にあってともに新しい溝に切られている。二段掘りで一段めは長軸205cm, 短軸135cmの長楕円形プランとなり, 二段めの主体部は内法で長軸135cm, 短軸40~42cmを測る。一段めの床面は平坦でなく中央に向かって傾斜している。主軸方位N-80°-W。出土遺物なし。



第41図 5号土墳墓実測図 (1/30)

6号土墳墓〈D6〉（図版16，第41図）

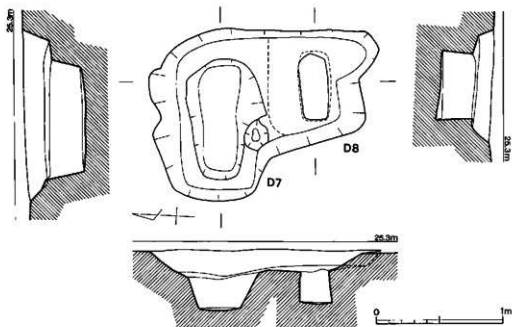
D5の南にある。二段掘りで、一段めは長軸222cm，短軸145cmの長方形プランをなし，二段めの主体部は内法で長軸130cm，短軸30～38cmを測る。きわめて整った掘り形というべきである。東側が頭位であろう。主体部の深さは60cm。主軸方位S-85°-E。出土遺物なし。

7号土墳墓〈D7〉（図版17，第42図）

D5の東にあり，D8と平行して存する。D8とは本来先後関係にあったはずであるが，調査時には判断しえず，結果として不整形の掘り形内に二基が並列して営まれている格好となった。二段掘りであり，一段めは長軸138cm，短軸約85cm，二段めは内法で長軸84cm，短軸25～32cmを測る。東側を頭位とみてよいだろう。主軸方位N-87°-E。出土遺物なし。

8号土墳墓〈D8〉（図版17，第42図）

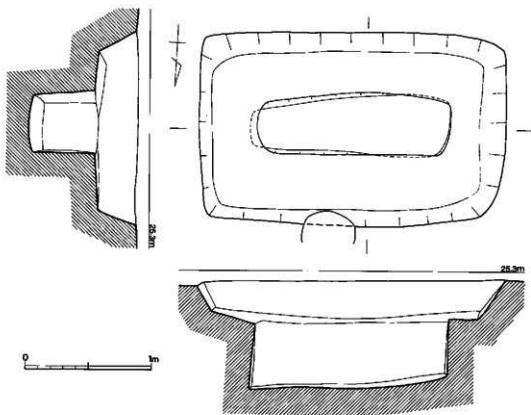
D7の南隣りにある。二段掘りで，一段めは長軸90cm，短軸およそ75cm，二段めは内法で長軸56cm，短軸20～24cmを測る。四つの壁面ともに立上りが内傾している。主軸方位はD7と同じ。出土遺物なし。



第42図 7・8号土墳墓実測図（1/30）

9号土墳墓〈D9〉（図版17、第43図）

23号孤立柱建物の北西至近にあり、B群墓地の最東端に位置する。二段掘りで、一段めは長軸246cm、短軸153cmの長方形プランをなし、二段め主体部は内法で長軸160cm、短軸30～47cmを測る。小口幅のあり方と床面レベルからみて西側が頭位であろう。東小口壁はかなり内傾する。主軸方位S-87°-W。出土遺物なし。



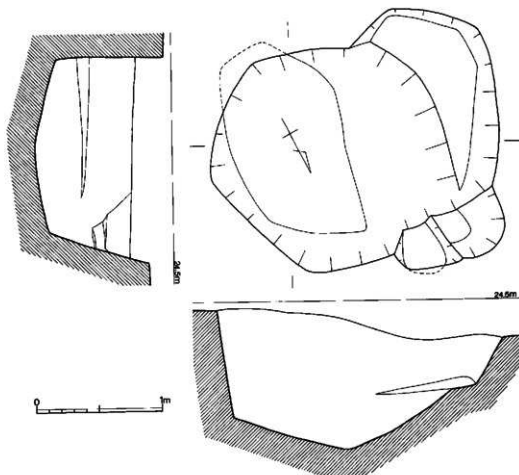
第 43 図 9号土墳墓実測図 (1/30)

3. 祭祀遺構

V区のA群墓地内にて9基の甕棺墓に囲まれたちょうどまん中あたりに不整形の土壌がある。遺構検出時に黒色土の入りこんだ土壌最上面から丹塗土器片が出土した。また発掘しはじめて5cmくらい掘り下げたところで扁平磨製石鏃が一点出土した。そのあと土器の出土もなく遺構の性格をどう捉えるか考えあぐねたが、とりあえずは墓地内での祭祀に関する遺構であろうと考えた。なお、小郡市教育委員会1982年調査の中に祭祀としての1号土壌があるので、ここでは2号土壌としておく。

2号土壌 (図版13, 第44図)

東西方向に長い二段掘りの土壌である。最深部は検出面から112cmの深さになる。埋土の状況



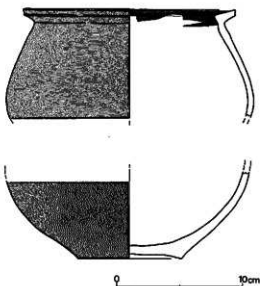
第 44 図 2号土壌実測図 (1/30)

遺物出土のあり方については先述のとおりである。

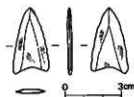
出土遺物 (図版21・25, 第45・46図)

弥生土器 1と2は胎土・焼成といい同一個体としてよいが接合はしない。また別の破片でM字突帯の部分があるけれどもこれも接合はしない。1はく字に折れ曲がる口縁で、内側に稜線が入る。外面は全部、内面は口縁直下1cm程までに丹を塗布する。外面はへう磨きである。また外面肩部付近には縦に細い条線らしいものが入っている。2の底部は外面のみ丹塗りである。また一部に黒斑がある。底部自体は少し上げ底となり厚みはそれほどない。胴部への移行のカーブに特徴がある。

磨製石鏃 扁平で凹基になる類である。表裏ともに鋸は鋒から6～9mmの所までしかなく、そこからは稜線が二方向に別れていく。一側面の刃部は刃こぼれが多い。凹基部分はきれいに研磨されている。全長3.5cm, 最大幅1.9cm, 厚さ0.2cm, 重さ1.6gを測る。



第45図 2号土坑出土土器実測図 (1/3)



第46図 2号土坑出土磨製石鏃実測図 (1/2)

D. その他の遺構と遺物

その他の遺構としては、溝・土塙・ピットなど時期を違えていろいろと検出されたが、多くはごく近時の農地整備・植樹等に関わるものであった。ここでは、そのうちのいくつかについて触れる。

1. 土塙

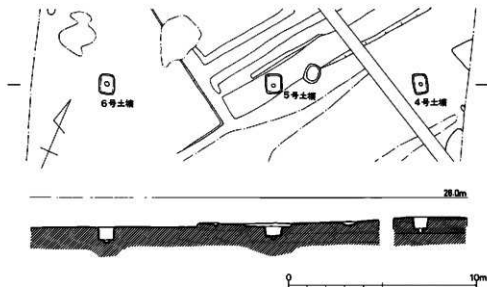
5基について記すが、このうち4～7号は所謂おとし穴とされる土塙である。4～6号については調査中の不手際もあって個別実測図を欠いている。

3号土塙（図版9，第29図）

K36を切って営まれた土塙で、やや角張った楕円形プランをなす。長軸107cm、短軸72cmを測り、深さは最深部で83cm。出土遺物はなく、性格も不明。

4～6号土塙（第47図）

V区南半部にある。ちょうど路線内に3個がバランスよく配列された如き占地となっている。中心距離で4－5号間は7.8cm、5－6号間は8.8cmを測る。3基ともに長軸100～110cm、短軸

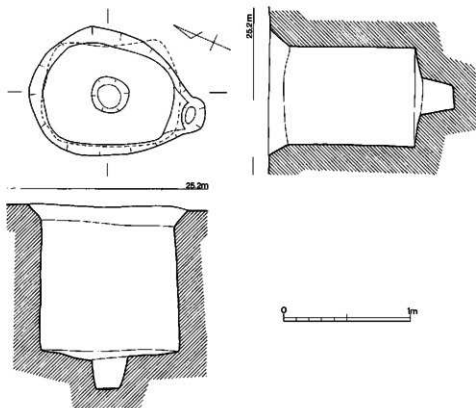


第 47 図 4～6号土塙位置図 (1/200)

70～85cm，深さ60～63cmで，ほぼ中央に小ピットを持つ。この小ピットは深さ9～22cmと一様ではない。3基ともに埋土は黒色土であった。いずれも出土遺物はない。主軸方位は厳密に計測しえないが，ほぼN-20°-30°-Wの間におさまっている。

7号土壇 (第48図)

42号住居跡の1mほど東の所にある。いま平面は長軸125cm，短軸100cmの楕円形気味のプランとなるが，検出面より20cm弱の所までは壁面が崩落しているので，本来は105×78cmくらいとしてよいだろう。床面は長軸110cm，短軸80cmの隅円長方形プランを示す。従って各壁面は僅かなりとも内傾している。床面までの深さは120cm。床面中央には直径30cm，深さ25cmの小ピットがある。主軸方位はN-23°-Wで，4～6号土壇の方向とほぼ同じである。出土遺物なし。南端に深さ40cm程のピットがあるのは本来伴っているものか否か定かでない。



第 48 図 7号土壇実測図 (1/30)

2. その他の遺物 (図版22, 第49・50図)

Ⅷ区のビットやその他の所から出土した土器について説明する。撓乱土中出土の石器などはⅢ-Aで触れたとおりである。

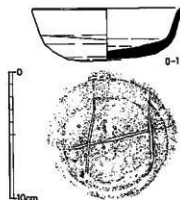
須恵器 O-1はⅤ区の表土下より出土した坏である。一部を欠くのみでほぼ完形に近い。底部外面は切り離したままの未調整で、そこにへう記号を持つ。このへう記号は一本線を引いたあとに、それと直交するように約5cm間隔で二本の平行線を引いている。口径12.0cm, 器高4.1cm。もともと土墳墓に伴っていたのでないかと考える。

O-2は40号住居跡の西側にあるビットから出土した赤焼き風の坏蓋である。2/3程が残存し口径11.4cm, 器高3.6cm。

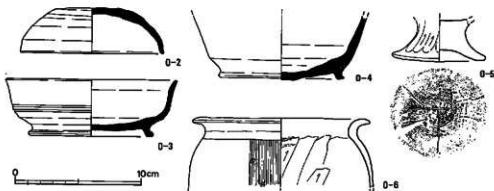
O-3・4はⅧ区のビット群中から出土した埴である。3は体部に二条の沈線を持ち、金属的な感じを受ける。復原口径13.6cm, 底径10cm, 器高4.5cm。4はあるいは壺の可能性もある。底径10cm。

土師器 O-5はⅦ・Ⅷ区境の農道を除去する際に表土下より出土した。何の脚台になるのかは明確にしない。脚台内面に細いへう記号が刻まれている。

O-6はⅧ区のビット群中から出土した大型の甕で、復原口径28.3cm, 口縁部の外反度が著しい。



第49図 Ⅴ区採集土器実測図 (1/3)



第50図 Ⅶ・Ⅷ区出土土器実測図 (1/3・O-6は1/6)

IV. おわりに

1. 7～8世紀代の干潟遺跡

i.

第三次調査で検出した7軒の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡についてまとめて記すと下表のようになる。各々の住居・建物はそれぞれが機能していた時期の一端を示す土器の出土が少ないため厳密な時期比定を難しくしているが、埋土中の土器などをも勘案してみるならば、およそ7世紀初頭から同後半の間に営まれている。

	主軸方位	総床面積(m ²)	主柱間面積(m ²)	カマド位置	出土遺物	備考
37号住居跡	N-100°-W	(16.95)	(3.39)	西	須恵器13、土師器18、陶器1、紡輪車1、土製品1	7C後半
38号住居跡	N-86°-W	29.26	8.12	西	須恵器11、土師器72、土師1、甲子1、土製品4、サメカイト片2	7C前半～中頃
39号住居跡	N-11°-W	24.62	5.17	北	須恵器19、土師器75、土製品2	7C前半～中頃
40号住居跡	N-11°-W	(30.69)	7.94	北	須恵器3、土師器31、土師1、土製品6	7C前半
41号住居跡	N-11°-W	(29.07)	7.5	北	土師器12、弥生土器1、砥石1	7C初～前半
42号住居跡	N-4°-E	(25.93)	7.3	北	土師器17、土製品5、スラッグ1	7C初～前半
43号住居跡	N-3°-W	27.23	6.12	北	須恵器5、土師器25、土製品1、弥生土器片2	7C初～前半
23号掘立柱建物	N-19°-E		15.12			7C中～後半?
24号掘立柱建物	N-15°-E		17.55			7C中～後半?

住居で最も古いのはおそらく42号住居であって、7世紀初頭の頃におかれよう。というのは7世紀初頭～前半代としてよい43号住居出土の土器が、41号あるいは40号住居出土のものとほぼ同じ頃と思われることより、(古)42→41→40→39(新)という切合い関係をもとに最も古

いのを42号住居とするものである。そのとき、いくら重複関係にあるからといっても、出土した土師器をみるにおいて極端な時期幅があるとは思われないことから、7世紀初頭～前半の中でも初頭に近い頃ではなかろうかと考える。

また7世紀前半～中頃の38号住居は、その位置関係から40号住居とは併存せず、それよりは新しいとみられる。7軒の中で最も小規模の37号住居は7世紀後半代においてよいだろう。つまり、7世紀初頭から後半までの間の住居の変遷は、42→41…(43)→40→39…→38…→37の順となろう。

建物2棟は、24号掘立柱建物の柱穴埋土から出土した土器片を参考にするならば、37・38号住居と近い時期が与えられよう。これは、37・38号の住居のみカマドが西に向いていて、これらの主軸と23・24号建物の長軸とが、少々のズレは無視するとして、おおよそ直交するような方向をとることと無縁ではないかもしれない。

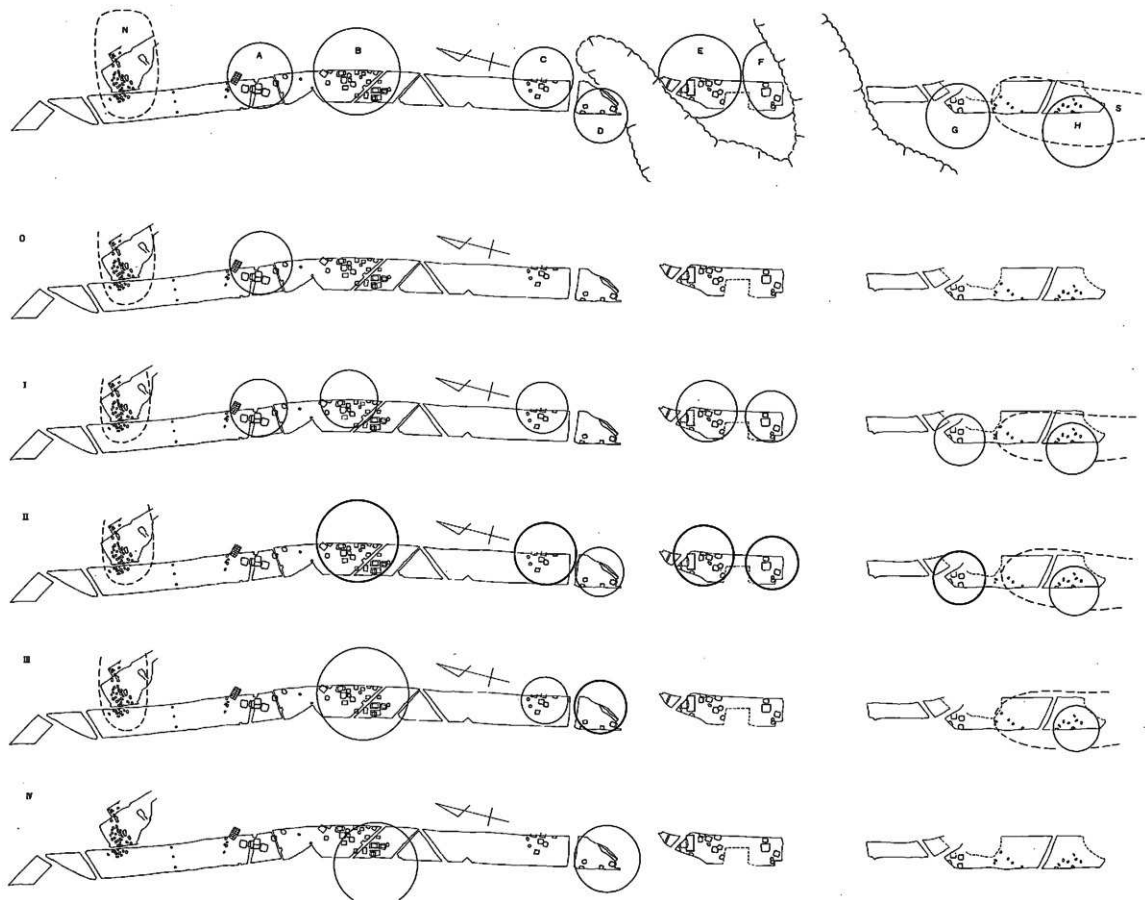
ところで、小都市教育委員会が報告した舟底1号墳および土墳墓に関わると思われる土器は、今回報告の37～43号住居跡出土土器と時期的に重なり合う部分が多い。そうすると、この7世紀初頭から後半という時期の干潟集落の住人たちの墓所のひとつは、その階層はともあれ、V区北端から東側にかけての所(第51図のN群とした所)であったと考えてまず間違いないとみられる。

ii.

先の第一次・第二次調査においては、7世紀中頃～8世紀中頃という時期に36軒の竪穴住居、22棟の掘立柱建物、19基の土墳(土器溜)や溝、井戸状遺構・土墳墓などが検出された。それらから出土した土器は7世紀中頃のⅠ期、同後半のⅡ期、8世紀前半のⅢ期、同中頃のⅣ期に編年されているが、大まかな傾向をいえばⅠ～Ⅲ期に竪穴住居が、Ⅲ、Ⅳ期に土墳が属することとなる。

今回報告する第三次調査分については、主体となるのは7世紀前半代である。以下の説明の便のためにこの時期をⅠ期に先行するものとして仮にO期としておこう。

第一次～第三次の調査結果を通観すると、総延長約1kmの帯状に長く限られた調査区において、総数43軒の竪穴住居、24棟の掘立柱建物、19基の土墳、溝状遺構、井戸状遺構、その他を検出している。これらのうち特に住居群は7世紀初頭～8世紀中頃という時期のなかで、その全体図を見てわかるように、調査区内にいくつかのまとまりとして検出されているとしてよい。当時の干潟集落はもっと大きな広がりをもっていたはずであるから、このいくつかのブロックをなす住居群は当時の集落全体からすればそのごく一部が現出しているものでしかないだろう。したがって、以下に見てゆくのも遺跡全容の一端を垣間みるものでしかないと予めことわ



第 51 图 干河迹线演变图 (1/1000)

っておかねばならない。

さて、その住居・建物の分布上のまとまりとしては第51図1のように8個の群が認められる。これをA～H群とする。H群には住居も建物も検出されていないが、生活時の廃棄物処理用の穴と思われる土壌があるので一群とした。またこれらとは別に、墓地の群としてN群・S群を設定しておく。

付図1の周辺地形図でもわかるように、D群とE群の間、F群とG群との間には小さな谷が入りこんでいる。またB群とC群の間には遺構のない空白地帯がある。つまり、A～H群として8個の群も占地上はAとB、CとD、EとF、GとHの4つの集団にまとめられるのである。

ここでA～H群が先に触れた0～Ⅳ期という分期の中でどう変遷しているのかをみると、次のようになる。

時期 群	0	I	II	ⅢA	ⅢB	Ⅳ
A		H	D			
B				H	D	
C				H	D	
D				M	D	
E		H・D・M	W			
F		H・D				
G			H			
H				D		
N						
S						

H：竪穴住居、D：土坑、M：溝、W：井戸

0期、すなわち7世紀初頭にはA群にて集落が営まれはじめるとともに、N群墓地もつくられるようになる。

I期になると、D群を除く7群にて竪穴住居や土坑がつくられてくる。

Ⅱ期には全ての群が機能しており、この干潟集落が最もなかやかであったといっていよう。時は7世紀後半、大宰府が現在地に機構を整えたころであった。また井上廃寺が創建されたのもこの頃ではないかと思われる。

Ⅲ期（8世紀）に入る頃にはA・E・F・Gの各群には既に住居は見あたらない。ⅢA、ⅢB期をとおして、B・C・D・H群が活動している中で、とくに土坑への土器の投棄が著しい。これは、掘立柱建物に住む人たちの所作の結果としてそれがあつた、と考えてよいだろう。

8世紀中頃のⅣ期になると、もうB群とD群でのみ人々の動きの結果を知るばかりである。この頃を境に、干潟集落に住んでいた人々はその拠点を別の所に移したと考えられる。

以上をまとめると、Ⅰ期からⅡ期にかけては竪穴住居群がA～Hの全群で営まれるとともに、A・B・C・E・Hの各群には掘立柱建物がつくられていたと思われる。しかし、その建物の数はまだ少なかったであろう。墓地はまずN群で営まれはじめる。ここには古墳と土墳墓とがある。やがてS群にも土墳墓が営まれるようになるが、それらは北から南へと時期を新しくしながら群を違えてつくられていっているらしい。いま4群ほどが認められている。

Ⅲ期以降の8世紀代になると、竪穴住居はB・C・D群に見られるもののごく一部の残存でしかない。かわりにB・D・H群にて掘立柱建物が主体となっていると思われる。ことにB群における建物群はその数も多く、この干潟集落のⅢ、Ⅳ期の中心的集団としてよいだろう。この群の3号土墳から出土した金製の玉はいろんな意味で示唆に富む遺物といえるだろう。

2. 弥生時代の干潟遺跡

a. 甕棺墓群について

i. 占地

今回報告した甕棺墓は成人用6基、小児用3基の計9基でしかない。これらは1982年度（昭和57年度）に小郡市教育委員会が国庫補助事業として調査した分と合わせて見なければ、墓地群の全体像を捉えられず、またその性格づけも意味をなさないものとなる。^(注3)市教委が調査したのは32基あり、成人用23基、小児用9基である。今次調査分と合わせると成人用29基、小児用12基の計41基となり、成人用と小児用との比率は約7：3である。

墓地群のあり方としては、この41基でひとつのまとまりある占地形態をなしている。つまり付図5を見てわかるように、K17・18・19を東限としてそれより東側には9号土墳墓（D9）があるのみで甕棺はみられない。また昭和54年にやはり小郡市教育委員会が単独事業として行った緊急調査のときも、調査区内には甕棺墓は検出されていない。ただ、このときの調査前に^(注4)その近くで甕棺墓が発見・破壊されているのであるが、これらもいくらず近の位置にあったとしてもK17～K19との間にはD9を介して少くとも7mの距離をおかねばならないことになる。ということは、東西28m、南北15mの範囲内にあるK1～K41は占地上は独立した一群として捉えてよく、以前に破壊されてしまった甕棺墓群はまた別の一群と考えてよいことになろう。このような墓地群の占地の違いは、ひとつには造墓集団が異なるということが考えられよう。造墓集団が一条のものとするれば二つの甕棺墓群は時期を異にしていると思われる。

ii. 時期と変遷



第 52 图 干渴達跡集落群実測図 (1/400)

さて、K1～K41の41基の甕棺の時期をみてみると、大きくはいわゆる汲田式といわれている弥生中期前半のものが大半を占めているとしてよい。今次調査のK33～K41の時期を、小郡市教育委員会調査分を含めて、橋口達也氏の編年にてらしてみると次のようになる。

(表5)

K II a		18
K II b		10, 14
K II c	35, 36, 37, 38, 40	2, 3, 11, 13, 17, 27, 29, 31 1, 15, 19, 26, 28 21, 26 7, 8, 23
K III a	33, 41 34	6, 9, 4, 12, 20, 22, 25, 30 24, 32

この時期的な変遷を図示したのが第52図である。以下に各期ごとに甕棺墓のあり方を見てみよう。

K II a 期はK18が1基のみである。市教委調査分の溝状遺構から中期初頭の土器が出土しており、報告者はこの溝状遺構を9号土壌墓(D9)に伴う祭祀遺構であろうとしている。とすればこの時期には土壌墓が併存していたとしてよいだろう。

K II b 期は同一墓域内に埋置されたK10とK14の2基がある。K10はK14より新しい要素が強いが、K14にあわせてK II b としておく。1号土壌の墳底にて出土した土器はこの期においてよいだろう。

K II c 期になると一挙に増えて23基を数える。この時期が最盛期といってよからう。23基の中にはK II b 期の要素が強いもの、次のK III a 期に近い特徴を持つもの等があり、それらはより古く位置づけるものが全体の南半部に集中し、新しくなると北半部へと分布を移していることが伺える。

K III a 期には13基が知られる。このうち成人棺は7基である。この7基も古い段階のもの(4基)と新しい段階のもの(3基)とがある。今次調査のときに検出した2号土壌の上面から出土した丹塗土器は、従来編年であれば中期後半に位置づけるところであるが、口縁内側の屈折がシャープで稜がつくこと、底部がやや上げ底であることなどから、やや遅った時期を示すものと捉えたい。K34に併行する時期の祭祀遺構であると考えられる。

以上をまとめると次のように考えられよう。K II a・K II b 期、すなわち中期初頭～前葉には1～2基程度の甕棺しか営まれていない。それはこの時期の墓地の主体が土壌墓・木棺墓にあったことを暗に示唆しているのだろう。その土壌墓・木棺墓はこの甕棺墓群の東側に分布の

中心を持っていると思われる。

KⅡc期になると甕棺墓の数は一挙に増加する。この頃の墓地群はよく二列・三列の“列埋葬”のあり方を示すのであるが、この遺跡の場合は見方によっては列をなしているように見えないこともないけれども、整然としたあり方をなしていない。

中期中頃のKⅢa期には再び甕棺墓は減少化の傾向にある。

b. 土壌墓群について

弥生時代の土壌墓群は二カ所に存する。

ひとつは小郡市教育委員会が調査したもので、前項甕棺墓群の東方にある。昭和54年度調査のD2～D6の5基と、昭和57年度調査分の中に1～2基があると思われる。これらはさらに東方へ分布が広がっているとみてよい。昭和54年度調査分は中期前半とされている。

もうひとつは今次調査で検出したもので、本文中にてB群墓地とした6基である。これらもその分布はさらに東方へ広がりをもつのは確実といってよい。僅か6基にて推定するのは危険ではあるが、二列に並んだように展開している可能性はある。弥生時代の中でもいつの時期につくられたのか全くわからないが、中期前半頃までのうちに営まれたと考えるのが妥当であろう。

なお、今までの干潟遺跡の調査の中で、弥生時代の生活遺構が検出されたのは昭和54年度の小郡市教委調査における貯蔵穴2基のみである。集落の中心はおそらく、第51図の7～8世紀代集落の中で示したA群とN群墓地との中間あたりにあると考えられる。

(註)

1. 小郡市教育委員会『干潟遺跡』(小郡市文化財調査報告書 第16集)1983
2. 福岡県教育委員会『干潟遺跡Ⅰ』(県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告1)
福岡県文化財調査報告書 第59集)1980
3. 註1に同じ
4. 註1に同じ
5. 橋口達也「甕棺の編年的研究」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXX—中巻』

福岡県教育委員会)1979

図 版



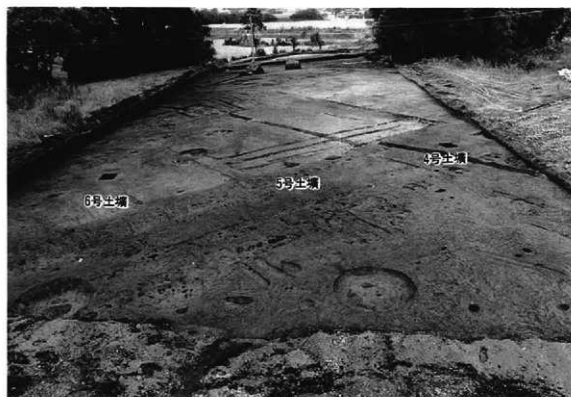
干潟道跡第三次調査全景（南から）



3-Ⅰ区全景（南から）



3-Ⅱ区全景（西から）



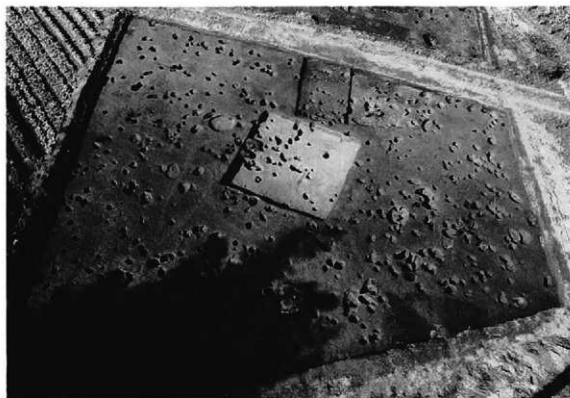
3-V区全景（南から）



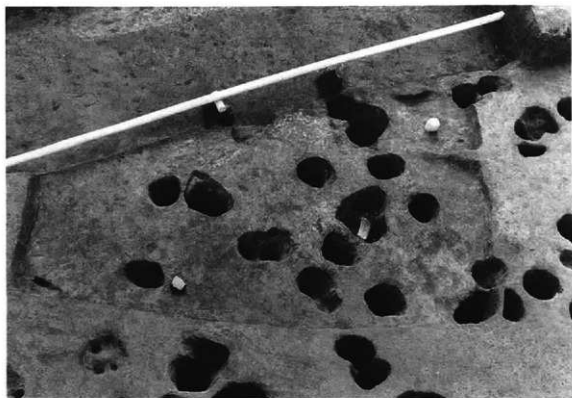
3-VI区全景（北から）



3-VI・VII区全景（南から）



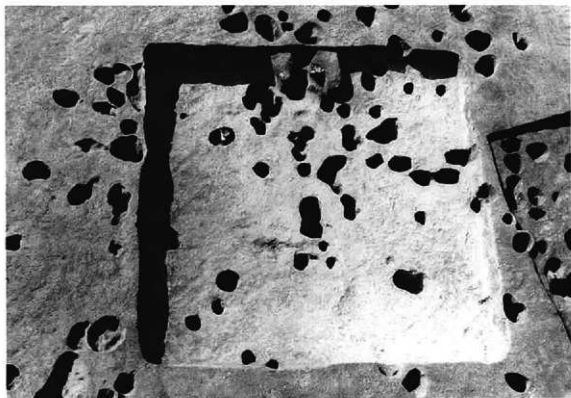
3-VIII区全景（南から）



37号住居跡（北から）



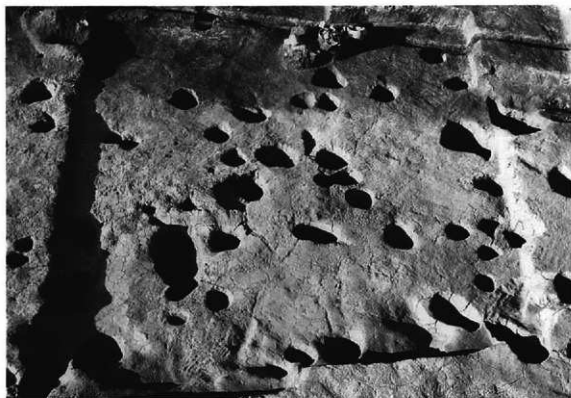
37号住居跡カマド



38号住居跡（東から）



39～43号住居跡（南から）



39号住居跡（南から）



39号住居跡カマド土器出土状態



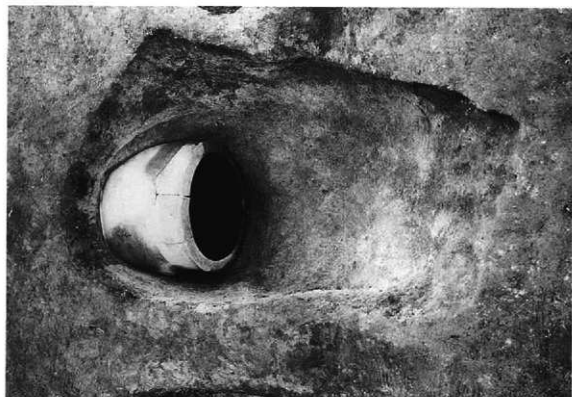
43号住居跡（東から）



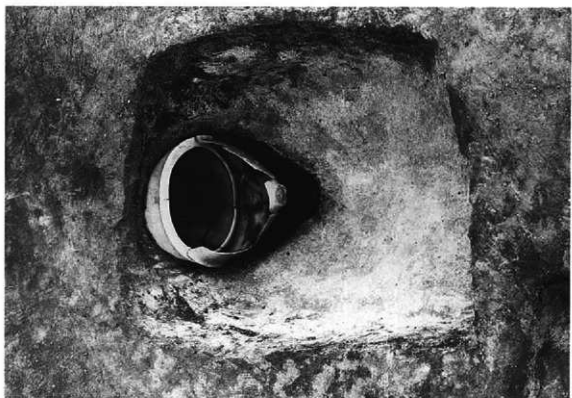
23号掘立柱建物跡（西から）



3-V区墓地群（A群）全景（北から）



34号變棺墓 (北から)



33号變棺墓 (北から)



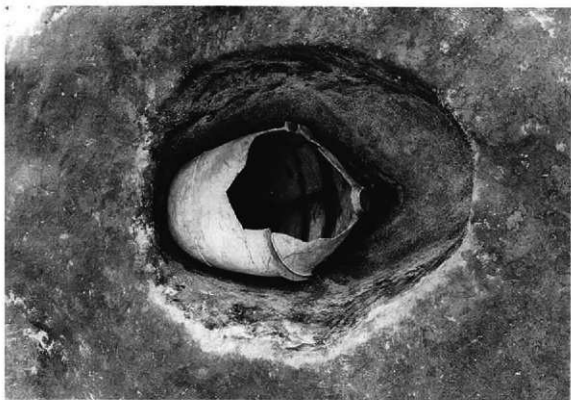
35号甕棺墓（北から）



36号甕棺墓（西から）



38号墓（西から）



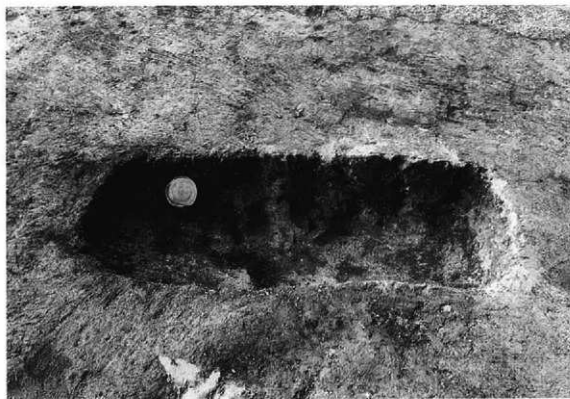
37号墓（西から）



2号土坑 (北から)



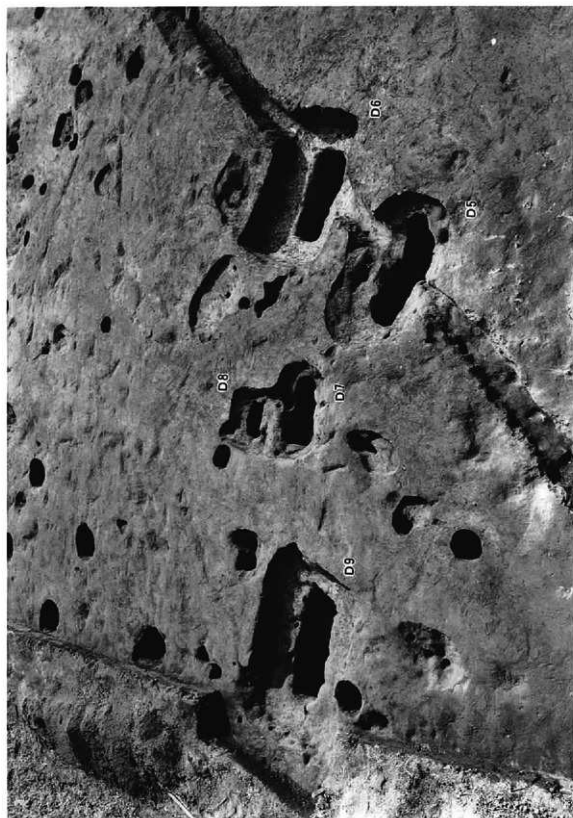
40・41号埋棺墓 (北から)



1号土墳墓（南から）



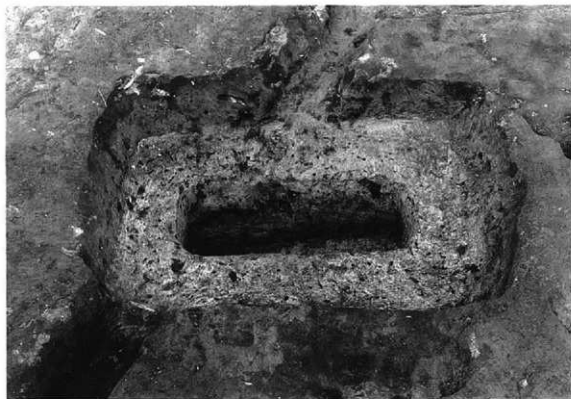
3号土墳墓（南から）



3-Ⅱ地区基岩群全景（北から）



5号土墳墓（北から）



6号土墳墓（南から）



7・8号土墳墓（南から）



9号土墳墓（南から）



37-10



38-9



38-1



39-5



38-6



39-6



38-8



39-9



38-10



39-10



39-11

37·38·39号住居跡出土土器



39-12



31-13



39-14



39-15



39-16



39-17



39-18

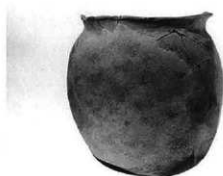


39-20



39-22

39号住居跡出土土器



39-24



43-5



39-25



43-6



40-2



D1-1



O-1



40-5



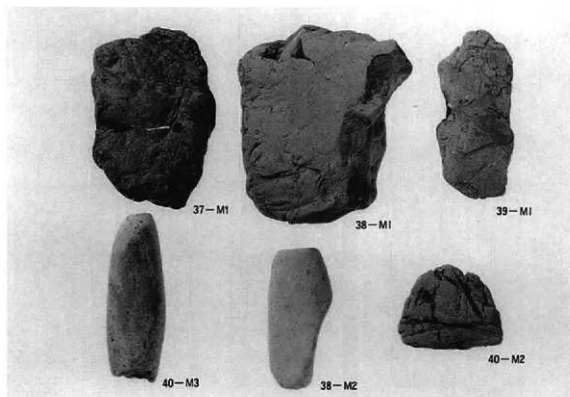
O-2



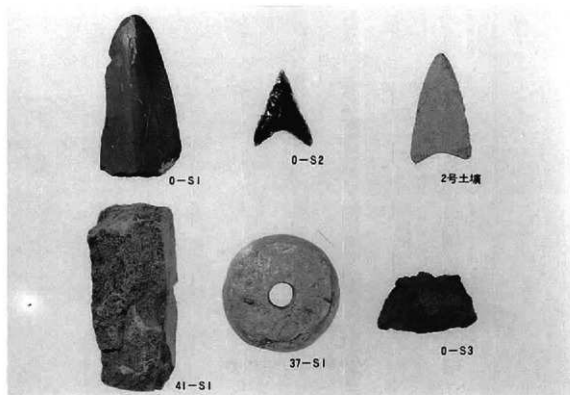
43-1



O-3



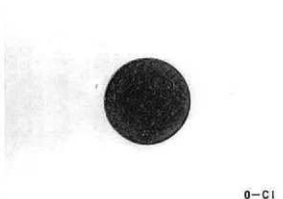
干涸遺跡出土土製品



干涸遺跡出土石器



38-SI



0-CI



43-MI



0-4

干潟遺跡出土土器・石器・金属器

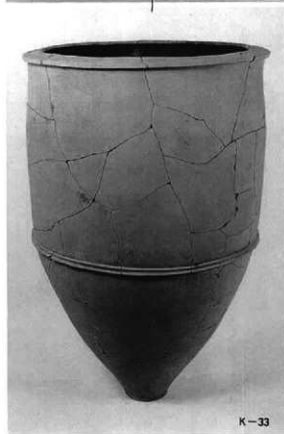


6号土壇

5号土壇

4号土壇

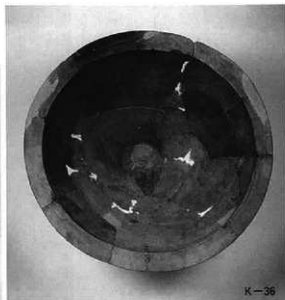
3-V区の4～6号土壇



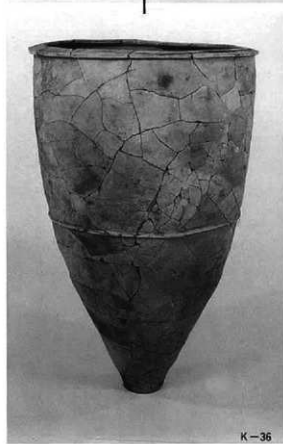
33・34・35号甕棺



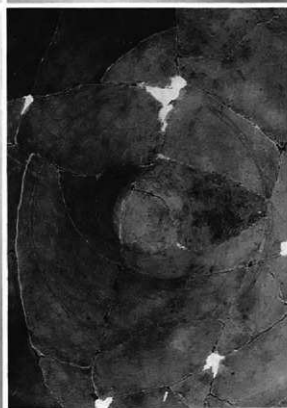
1

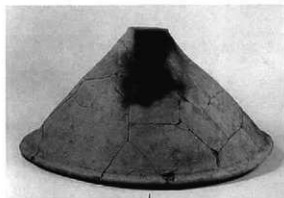


K-36



K-36





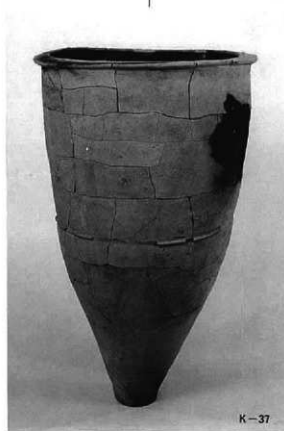
K-38



K-40



2号土坑



K-37

37・38・40号甕棺・2号土坑出土土器

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 63	登録番号 6

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 4

干潟遺跡Ⅱ

福岡県文化財調査報告書 第87集

平成元年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

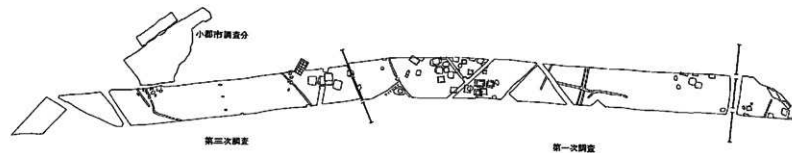
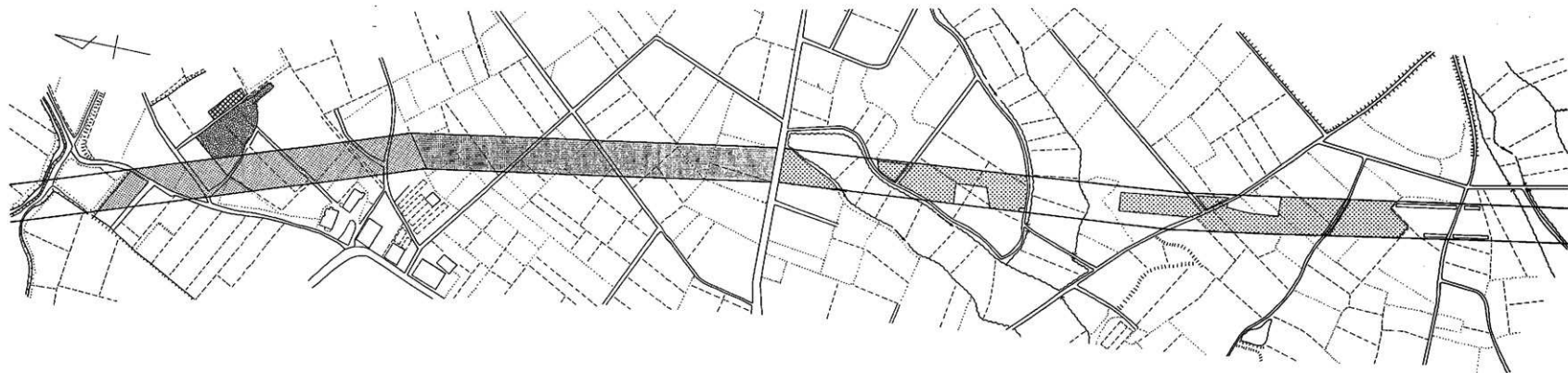
印刷 赤坂印刷株式会社

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 4

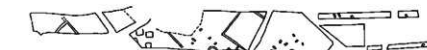
干 潟 遺 跡 Ⅱ

福岡県文化財調査報告書

第 87 集

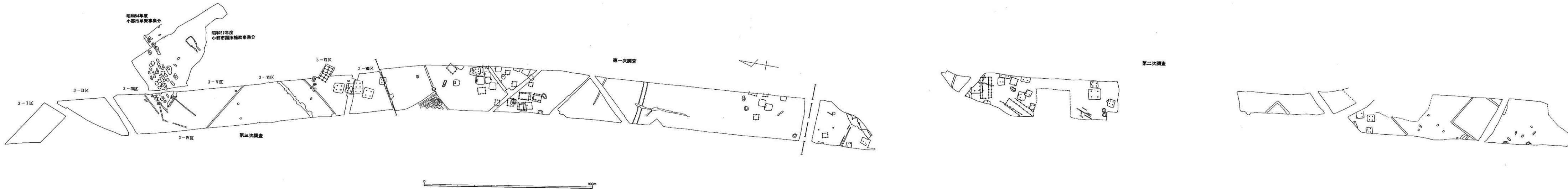


第三次調査

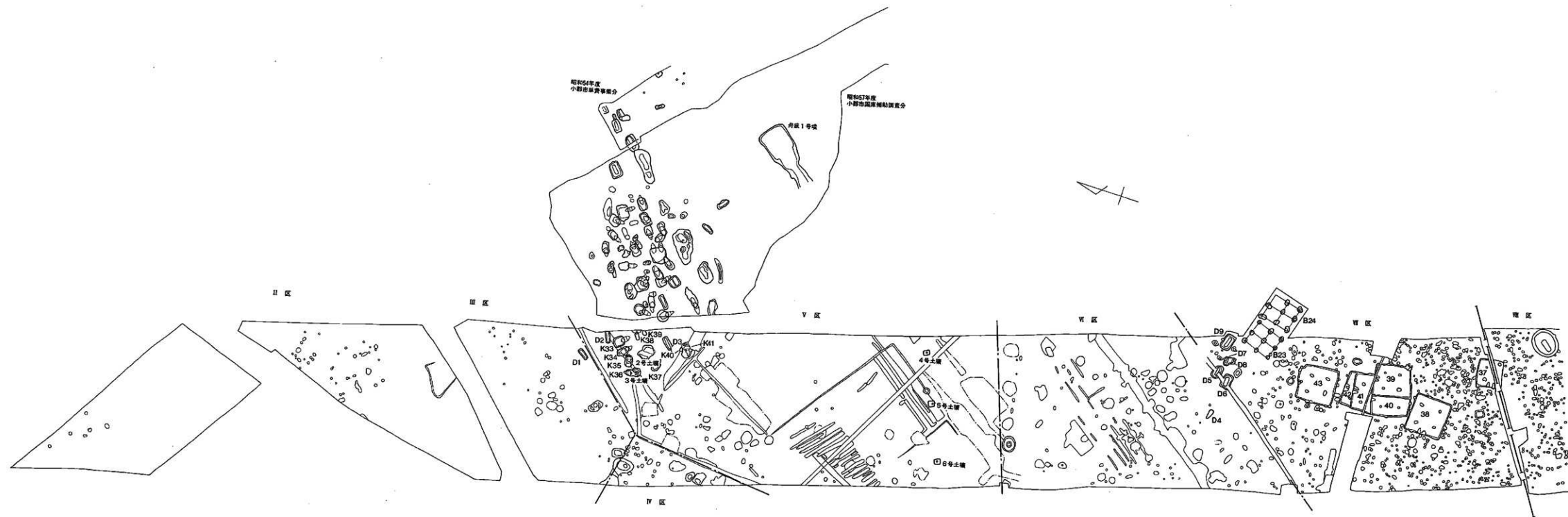


第二次調査

付図1. 干潟遺跡全体図 (1/2,500)



付図 2. 干潟遺跡第一次～第三次調査遺構配置図 (1/800)



付図3. 千海遺跡第三次調査遺構配置図 (1/400)

0 30m



付図4. 干潟遺跡第三次調査Ⅶ・Ⅷ区遺構配置図 (1/100)



付図5. 干潟遺跡基地群遺構配置図 (1/200)